
ロウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

覚醒未遂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウキユーぶー〜脆弱な6人目シックスメン

【Nコード】

N2130W

【作者名】

覚醒未遂

【あらすじ】

男バスVS女バスの試合も終わり、本格的にコーチに就任した昴朝のロードワーク中に会った、喘息で苦しむ少年（実は少女）との出会いが、また新たな風を彼に吹き込むのであった。

これは、（一応）バス経験者の作者が蒼山サグ先生の作品ロウキユーぶを読んで衝動的に書きたくなった物語です。

1日1回更新を目指してがんばりますっ！！
は無理らしいので、月・木・日の週3更新を予定しています。

プロローグ（前書き）

初めまして。覚醒未遂です。

衝動的に書きたくなったものですが、暖かい目で見守って欲しいと思っ
ています。

それではお楽しみください。

プロローグ

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……！……！」

……情けない。まだたったの5分位しか走ってないのにもう息をす
るのも辛い。でも、ここで立ち止まったらいつまでたってもこの苦
しみは克服できないよ。
そうやって、悲鳴を上げる僕の肺を叱咤して更にペースを上げよう
とする。が……

「はあっ……はあっ……ひゅっ……！？」

苦しい……息が……。

「かつ……ふっ……！」

そして、僕の意識はブラックアウトした。最後に覚えているのは、
アスファルトに体が叩きつけられた痛みと1人分の足音だった。

「づうっ……！？」

あれっ？ここは？僕は……一体……。
目が覚めたら、視界一杯に広がるのはアスファルトの黒ではなく、

晴れた青空だった。肺の苦しみがなくなっているのに気付き、ほっと息をついた。

「ねえキミ……大丈夫？」

「うわあぁっ!？」

びびり、びつくりした!驚かさないでよ!!こう見えて僕は結構小心者なんだ!!

恐る恐る声が聞こえた方に視線をやると、1人の男の人が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

ちなみに言っておくと、今僕はベンチの上で精一杯身を縮ませているところだ。もちろん、その声の主から身をかばう形で、だ。

その当人はと言うと、僕の反応を見て気まずそうに苦笑いしていた。僕も、過剰過ぎる反応をってしまったかな。少し反省。

「す、すみません……驚いてしまって」

「いや、こっちこそごめん。ランニングをしていたら目の前でキミが倒れたから、ここまで運ばせてもらったよ」

なるほど。この人が面倒をみてくれたみたいだね。辺りを見回してみると、先程僕が倒れた場所から少し戻った場所にある公園の片隅に、いることがわかった。

「本当に、すみません。ご迷惑をおかけしてしまい……」

「いいんだよ。気にしないで。もう体は大丈夫かな？」

「あ、はい」

「そうか、よかった。……あ、よかったらこれどうぞ」

そう言っ、彼はスポーツドリンクを手渡してくれた。……ここ

こは好意を素直に受け取ろう。

「ありがとうございます。あ、僕は掛樋かけひ〓〓クロード慧けいと言います。先程は本当にありがとうございます」

「いや、当たり前のことをしたままでだよ。俺は長谷川昴」

僕が名乗ると、彼 昴さんも名乗り返してくれた。うん。いい人でよかった。

「にしても、一人でランニングして倒れるなんて危ないな。今までこういうことはあったのか？」

「いえ、意識を失うなんてことはなかったのですが、今日はちょっと無理が祟ったみたいで……強い発作が出てしまったみたいですね」「発作って……何か病気？」

しまった、ついべらべらと話しすぎてしまったかな？昴さんが心配そうな顔で僕を見ているよ。
なるべく暗くならないよう、努めて明るく話した。

「持病でちょっと喘息を。肺を鍛えるという意味で毎日走ってるんです」

「そっか。大変だな」

「ふふ、ありがとうございます。……それでは僕はこの辺で。」

あ、スポーツドリンクありがとうございます」

「ああ、じゃあ気を付けてな」

微笑みかけた後、僕は走り出した。
まさかこの出会いが、僕をあの場所へ連れ出すことになるとは思いませんでした。

scene・1 出会いと友達

プロフィール

【名前】 掛樋〓C〓慧（かけひ〓クロード〓けい）

【生年月日】 3 / 10

【血液型】 A

【身長】 158cm

【クラス】 6年C組

【所属係】 掲示係

【学業】 極めて良（ただし、体育で見学することが多い）

【特技】 （ストリート）バスケ。家事全般

【好物】 好き嫌いはない。あえていうならじゃがいもを使った料理が好き。（例：ジャーマンポテト、フライドポテト）

【人物】

母親が居らず、父親と兄3人と暮らしているためかなりのしつかりもの。だが、男系家族で育った為口調が男っぽく、容姿も中性的。胸は寂しすぎるほどまっ平ら。父や兄、周囲の人間の影響でバスケットを幼少期からやっているが、部活などの“競技”^{スポーツ}のバスケットよりも“遊び”^{パフォーマン}に近いストリートバスケスタイル。普段は礼儀正しく謙虚な性格だが、バスケットになると途端に相手をおちよくなるような、一見相手で遊んでいるかのようなプレイスタイルになる。自身では男っぽいのを少し気にしているが、スカートなど女の子の服を着るのにかなりの抵抗や恥じらいを感じる上、自分を溺愛する父、兄たちが『可愛い格好をすると変な虫が寄る』と言ってあえて男の子っぽい服を着せるのでなかなか女の子らしくなれずにいる。喘息のため、長時間激しい動きをし続けることが出来ない。

「あ、そうだ。今回の仕事が終わったら暫く日本に腰を落ち着かせることに決まったから」

僕の父さんは、有名な建築デザイナーだ。しかも専門は家屋ではなく、オフィスビルやスポーツ施設といった規模が大きいものなので、1回の仕事が長く続く。なので新しい仕事が決まる度に家を引っ越していた。それも国内ではなく国外だ。

だから、今まで沢山の国で沢山の人と出会ってきた。父さんの仕事がそろそろ終わると知っていたし、引っ越しもそろそろだと思っていた。

次はどんな町に行くんだろう。どんな人達がいるのだろう。お世話になった人達にお別れしなくては。近所のリチャード君、寂しがるだろうな。

期待半分、寂しさ半分で次の引っ越し先と仲良くなった皆のことを考えていた僕は、だからこそ父さんの言葉に驚き、料理を乗せたお皿をテーブルに置く形で手が止まってしまった。

「え？……どうしたの？」

「いやな、そろそろ日本食が恋しくなったのと、御爺様が慧に会いたいところなるからな」

と、話す僕の父。掛樋^{シヨツユア}「J」ミツシエル。45歳日本国籍のアメリカ人。いつでも心は日本人なんだそうだ。

確かに、ここ3ヶ月ほどお米を食べてない。味噌や醤油も近くでは売っていないので現地の料理になってしまう。お爺様とも半年くらい会っていないだろう。必要以上に僕を可愛がるお爺様。抱きつい

てきて蓄えられたひげをこすり付けられるのはちょっと痛いけど、僕もお爺様には会いたい。

「それにな、そろそろ慧にも……一箇所で友達を作らせてあげたいとおもつてね」

「父さん……」

「さ、慧が作ってくれた美味しい料理が冷めないうちに早く食べよう。兄さん達も起こして、食べ終わったら引越しの準備しておいてくれ」

「はい。じゃあ起こしてくるから先に食べててね」

全ての料理を並べ終え、父さんがそれに箸を突いているのを背中を感じながら、僕はリビングから出た。顔は、期待と父さんの気遣いから満面の笑みになっていたに違いなかった。

それが、つい3週間前のこと。

父さんの仕事も無事終わり、僕たちは日本に帰ってきた。新しい学校にも入学手続きは済ませたし、準備はぬかりない。今度から新しく通う学校は、私立慧心学園。制服を見た時はあまりの可愛らしさに赤面してしまい、着たくないと言っのが正直なところだけど……流石に無理だよな。ま、まあその辺は慣れていくしかないんだろうね。学校には次の月曜日……詳しく言えば明日から通うことになっている。今日はこれからお世話になる町を詳しく知ると、ついでに日に当たりたいのと散歩をしている。ついでに言えば、今朝危ないところを助けてくれた人に偶然でも出会えたら……とか思っていたけど、流石にそこまで都合よくいかないので、断念。

そして今、たまたま通りかかった公園でバスケットボールを見つけ

た。こんなところにあるんだと驚きつつ、僕も今までバスケットで友達を作ってきたので大好きだ。自然と頬が緩み、近くに落ちていたボールを拾ってシュートを打ってみる。

……ドンツ、パスツ

バックボードに当たり、リングを通過した。 うん。爽快だ。調子がよくなりそのまま大技をやってみようかなとか思い始めた時、大声で怒鳴られた。

「あ！！何人のボール使ってるんだよ！！」

声に驚き振り返ると、僕の後ろ5mくらいのところにツンツン頭の僕と同じ年くらいの男の子がいた。眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに僕を……いや、僕が持っているボールを指差している。どうやら、このボールは彼が使っていたものらしかった。

「返せよ！！俺のボール！！」

「え、あ……」

僕が固まって動けないでいると。彼は不機嫌そうにズンズンと足音を鳴らしながら近づき、奪い返した。

「い、ごめんね。悪気はなかったんだ。ただ誰かの忘れ物になって

……」

「……………」

思わず肩をすぼめて謝ると、彼を包んでいた怒気のオーラが徐々に陰を潜めていった。

「こつちこそ……わかるかったよ。いきなり怒鳴ったりして」

気まずそうに、目を逸らしながらそう言ってくれた。ふふ、本当は優しい人みたいだね。

「うん。ありがとう」

「何お礼言っただ？」

「え、ああ。ボール、使わせてくれてありがとうってね。……ねえキミはこの近くに住んでるの？」

「ああ、まあ……」

「僕は掛樋〃〃慧。ついこの前引越してきたばかりなんだ」

「俺は竹中夏陽。お前、バスケやってるのか？」

その後、軽く僕は今までのことを夏陽くんに話した。今まで色々な国を転々としていたこと、しばらくぶりに日本に帰ってきたこと、これからは日本で住むこと。そして、僕が今までバスケをやっていたことと、慧心学園に転入することを話したら、彼は凄く嬉しそうにしていた。彼も、自分はバスケが大好きだと言うことを話してくれ、すぐに意気投合した。そして、慧心学園にはちゃんとバスケボール部があり、彼がそこに所属していることもわかった。

「なあ慧！お前も当然バスケット部に入るんだろ！？」

「うーんどうかなあ。僕はしっかりとした団体でやったことないから不安なんだ」

「そうなのか……じゃあ、せめて1対1で勝負しようぜ！！」

当然、こうなることも予想は出来ただろう。無論、僕はすぐに承諾した。

勝負が終わり、僕たちは地面に座っていた。今回は運良く発作が出なかったから、最後までやりきることができた。結果は……僕の勝ちだった。

「お前……強すぎだろ………」

「ふふ、ありがとう。でも、夏陽くんも、上手いじゃない」
「……まだまだだろ」

時計を見ると、そろそろ帰って洗濯物を取り込んだり、夕食を作ったりしなければならぬ時間帯だった。

「あ、そろそろ帰らないと………」

「え！？もう帰るのか！？もうちょっとやろっぜ！！」

「ごめんね。でも帰らなきゃいけないから……また明日。学校で会おう」

「そっか……わかった。じゃあ明日な」

渋々と言った感じで、彼はわかってくれた。ほっと一息つき、僕はそのまま彼に背を向ける。

「おい慧！！」

公園から出たところで、夏陽くんが声をかける。

「何？」

「同じクラスに、なれるといいな！！」

「……ふふ、そうだね！！それじゃあまた！！」

この町での初めての友達は、とても気のいい男の子だった。

でも、僕は1つ彼に大きな誤解を与えたままだった。

scene・2 転校生はハーフ

side・N

今朝の俺は、そうとう浮かれていたんだと思う。もちろん原因は昨日のアイツ。

掛樋かけひ Cロード 慧けい。金髪の、ちょっと頼りなさそうな顔をしたアメリカ人とのハーフの少年。ストリートでバスケットをやっていたといい、見たことも無いような技術で俺を圧倒した。そのくせ気取ったところは一切なく、負けても悔しいけど不思議と嫌な気分にはならなかった。

そんなやつが入れば、間違いなく男子バスケット部にいい影響を与えてくれる。そう思って、俺は慧を心待ちにしていた。

朝、席に座っていると真帆のヤツがうるさく騒いでいた。

「ねえねえ!! 今日テンコーサーが来るんだって!!」

「転校生?」

それを紗季がめんどくさそうに対応している。

「そう!! しかもアメリカから!! やっぱこう…… 『ニホンスバラスィーデスネツ!! ハツハ!!』とか言うのかな!？」

「そんなアメリカから来るイコールアメリカ人なわけじゃないんだから。もしかしたら帰国子女とかかもしれないでしょ? さっさと席につきなさい」

「でさでさあ〜」

「

まったくうるさいヤツだ。でも、真帆の言う転校生ってやっぱり慧のこと……だよな？そうか、同じクラスか……これは楽しくなりそうだ。

日本にはあまり滞在したことはないって言ってたし、しばらくは俺が面倒見てやるうとか、D組のみんなを紹介してみんなでバスケットしようとか考えていると、チャイムと同時に美星先生が入ってきた。

「知っている人もいると思うけど、今日は新しい友達がやってきました！！」

やっぱりそうだ！！

俺の心臓が鐘を鳴らし、期待が頂点に達した。

「それじゃあ入ってきてー！！」

先生の声から数拍置いた後、控えめに静かにゆっくりとドアを開けてソイツが入ってきた瞬間。

ソレは、一気に落とされた。

side . k

うう、やっぱり恥ずかしい。僕にはこんなの絶対に似合わないって……。ほら、みんなも僕をじっと見てるし、ああ絶対顔真っ赤だ！！
そう言えば今日の夕飯何にしよう？父さんは仕事で遅くなるって言うってたし兄さんたちも部活や仕事で遅くなるかもって言うってたから

少し手間をかけた料理でも作ろうかな。それにえつと……ええつと……。

「慧くん？あの……もしも聞いてる？大丈夫？」

「はい？ あ、す、すみません！緊張してしまつて……」

「にははは。大丈夫大丈夫。ほら、自己紹介して」

「あ、はい」

現実逃避していた頭を何とか戻して、みんなと向き合う。これから仲良くする人たちだから、しっかりと挨拶しないといけないね。

「……掛樋〃C〃慧です。父の仕事の都合で、L・A・から引越してきました。好きなことはストリートバスケットです。日本にはあまり来たことがないので、常識が所々抜けているかもしれませんが、どうぞよろしく」

そう言い終わった途端、1人の男の子が立ち上がり僕を指差す。つて

「な、夏陽くん!？」

「け、慧おまつ はあ!?!はあ!?!?はああ!?!?!?」

「何朝つばらから3わけわからんポイントも獲得してんだ？」

「先生は黙つててよ!!慧お前女子だったのか!？」

「あ、あれ?言つてなかつた……け……?」

確かに、言つてなかつたような気がしなくもないような……。

「あれ?2人とももしかして知り合い？」

先生が意外そうな顔で尋ねてくる。夏陽くんは目を見開いて口をパ

クパクさせているし、僕が答えた。

「はい。昨日散歩中に偶然出会って。……ジャージだったから勘違いさせてしまったみたいですよ。ごめんね夏陽くん。その……隠してたつもりはなかったんだ。ほら僕って……男の子っぽいから、さ」

僕が謝ると、気を取り直したかのようにハツとなり、気まずそうに視線を泳がせる。

「い、いいよ別に……ちょっと驚いただけだし」

「うん。ごめんね。……ありがとう」

「まあなんだかよくわかんないけど、丸く収まったところだし、ええっと空いてる席は……」

「みーたんみーたん！……ここ！……ここ空いてるよー！……」

見ると、栗色の髪を2つに縛っている女の子が自分の隣りの席を指している。

つてかみーたんて……

「おーじゃあそこでいつか。慧くん。あそこに座ってね」

「はい。わかりました」

導かれるままに席に座ると、先程の女の子が話しかけてきた。

「あたし三沢真帆！……よろしくねけっちゃん！……」

「けっちゃんて……うん。よろしく。真帆くん」

あだ名はちょっと恥ずかしいけど、賑やかで話しやすい子だ。

「ねえねえ！……さっき言ってた“えるえー”ってどこ？」

「ロサンゼルスのことだよ。“Los Angeles”の頭文字をとってL・A。」

「ストリートバスケットって何？フツのとは違うの？」

「主に室外でやるバスケットだけど、部活でやるスポーツって言うよりも、遊びでやるパフォーマンスって感じかな？あっちではけっこうメジャーなんだ」

「日本語上手だよね！！英語も話せるの？」

「父が親日家だから日本語はスラスラ言えるよ。英語とフランス語なら、日常会話程度に」

「あとね！！あとね！！」

……ちよつと賑やか過ぎるのが玉にキズ、かな？

「こら真帆。掛樋さん困ってるでしょーが。ってか授業中なんだから静かにしろ」

「うう、わかったよ」

真帆くんの後ろにいる子が、彼女の頭に拳骨を落とした。はは、痛そうだ。

「ごめんなさい掛樋さん。私は永塚紗季。紗季で構わないわ。クラス委員だから、困ったことがあったら言ってね」

「うん。わかったよ、紗季くん。僕も慧でかまわないよ。よろしくね」

そして、前を向いてマジメに授業に取り組むことにする。少しシステムがあつちと違ったけど、内容はわかったからよかった。

そして、休み時間になると5人の女の子に囲まれた。内2人はさつき話した真帆くんと紗季くん。

「初めまして。湊智花です」

「香椎愛莉……です」

「おー。ひなた。袴田ひなた」

「掛樋〓〓慧です。よろしく」

「あたしたちバスケット部に入ってるんだ。ねえねえ、けっちは部活入るの？」

「どうしようか迷ってる場所なんだ。今まできちんとした団体に入ってプレイをしたことがないからね。少し不安で……」

情けなく苦笑いをするけど、真帆くんは笑って受け流していた。

「そんな厳しいところじゃないよ。すばるん優しいし」

「すばるん？」

「長谷川昂さん。私たち女子バスケットボール部のコーチをしてくれているの」

「長谷川、昂さん……」

僕が聞き返すと、智花くんが説明してくれた。
もしかして……

「ん？どうしたけっちゃん」

「いや………うん。そうだね。次に活動する時に参加させてもらってもいいかな？」

「おお！？本当か！？」

「ご迷惑じゃなければ、ただどね」

「迷惑なんかじゃないよ！！ね」

真帆くんが促すと、みんな頷いてくれた。

「ええ。駆け出したから、かなり人数が少ないしね」
「それに、やっぱり人数が多いほうが楽しいと思う」
「おー。けいもいつしょ」

順に紗季くん、愛莉くん、ひなたくん。

「それに、アメリカでバスケをしてたんだよね？」

「うん。あくまでストリートだけだね」

「どんなプレイをするのか、とっても楽しみ」

と、笑顔で智花くんが言ってくれた。

はは、本当に気のいい人ばかりだな。

s c e n e . 3 恥らう慧(前書き)

な、何とか間に合いました……。PV数がいつの間にか1,000を越えていたので凄く驚きです。さすが口ウキゆうぶ。お気に入りも10件を越えていたので非常に嬉しいです。これからもよろしく願います。

あと、感想等あれば非常に喜びますー!!

s c e n e . 3 恥づけ慧

〔 Secret talk 〕

慧

『 ね、ねえ……ホントにこの恰好じゃないとだめなのかい？ 』

真帆

『 ダメダメ。シンニューサーなんだから 』

慧

『 だ、第一僕にはこんな格好似合わないし……恥ずかしいよ…… 』

……

ひなた

『 おー。けい恥ずかしがり 』

真帆

『 おっ。その目線いいぞ……潤んだ瞳でアタックだ……！ 』

慧

『 ねえ話を聞いてよ……！ 』

s i d e o t h e r

放課後、体育館では智花たち女子バスケット部が練習をしていた。昴が来るまでストレッチをしたり、軽く走ったりして身体を暖める。そして今、昴が体育館に入ってきた所だ。いつもならここから彼の指示にしたがって練習を始めるのだが、今日は少しちがった。

「え？新入部員？」

「そうなんです。今日転入してきた子が前の場所でもバスケットをやっていたらしくて、話をしたら是非参加させて欲しいって」「へえいいじゃないか！！それで、その子は？」

智花の話聞いた昴は、嬉しそうに顔を綻ばせる。だが肝心の慧が見当たらない。

すると、真帆が何か企んでいそうな笑みで手を上げる。

「ハイハイ！！すばるん！！けっちゃんならこっちだよ！！」

「おー。おにーちゃんこっち」

それに同調したひなたと一緒に、昴を体育館倉庫前まで引きずる。紗季たちも、またかとあきれ顔でその後ろについていった。

「じゃあちよっつと待っててねー」

そして、单身倉庫の中へと入っていく。

「ああ！！けっちゃん！！逃げんな！！」

「無駄無駄！！お前の服は全て預かっているう！！」

「つつかまえたああ！！ほら無駄な抵抗はよせえ！！」

等々、かなり不安にさせる言葉が聞こえてきた。

「む、無理無理無理無理絶対無理だよ！！こんな格好じゃあ出れないよ！！」

「諦めろ！！ここは完全に包囲されている！！さっさと出たほうが楽だぞ！！」

「お願いだよ真帆くん！！普通の服を着させて！！」

なんでこんなに細い腕なのに振り切れないんだ！？

僕は別室でこのメイド服に着替えさせられた後、倉庫へと連れられて中で待機するように言われていた。暗くて最初は自分の姿を意識せずにいられたのだけれども、着ている服の重みで徐々に自分がどれだけ恥ずかしい格好をしているかが嫌になるほど理解できた。いや、させられた。

そして、倉庫の外が騒がしくなってきたかと思ったらいきなり倉庫のドアを開け放って真帆くんが現れ、現状にいたる。

それはともかく、この状況をどうにかしなくちゃ……そうだ！！

「やっ！！」

「うあっ！！なに！！」

僕が思いついた案。それは、顔を伏せながら僕が出せる最高速度で駆けて、僕と認識させないように教室にある予備のジャージを取りに行くというものだ。

早速、今まで後ろに踏ん張っていた力を逆向きにして一気に駆け出すと、真帆くんは尻餅をついてこけた。

よし……このまま扉を開けて駆け抜ければ

！！

「あまあい！！ひな！！」

「おー。」

と思ったが、いつの間にかいたひなたくんが僕の前に両手を広げ、扉を背にして立ち塞がる。小さい体を一生懸命広げて見上げてくるその姿を見ると……。

「う……」

うう、切り込めない……。この子に荒い手を使うとなんだか人として何かを失うような気がしてならない！！

「隙ありい！！」

「しまった！！」

怯んでいる隙に、立ち上がった真帆くんが僕を羽交い絞めにしていく。くっ、振りほどけない。

「ひな！！コアラアタックだ！！」

「おー。こあらあたーっく」

「うあ……これは卑怯だー！！」

ひなたくんが、僕の体に張り付いてくる。これで僕が抵抗したらひなたくんが落っこちて、運が悪ければ怪我をしてしまうかも……。

「ひっひっひ。さあ年貢の納め時だー！！」

「あ……あ……ううう……」

終わった何もかも……。

「それはあんたよ」

「ぎゃっ!!」

と思った時、救世主が現れた。紗季くんだ。

「なにケイ使って遊んでるのよ。ひなも、前から真帆の言うことな
んでも聞いちゃダメって言うてるでしょ？ケイ泣きそうになってる
じゃない」

「けっちんごめん」

「けいごめんささい」

「あ、う、うん。大丈夫だよ。……できれば、早く服を返して欲し
いけど」

2人は謝ってくれたが、僕はまだメイド服のままだ。はやく……開
放、されたい。

「改めまして、初めまして……ではないですよ？覚えてますか？」

コートである昴さんを前にそう言うと、みんな（特に智花くん辺り
が）驚いたように僕を見てきた。まあ、確かにそうなるよね。つい
この前まで外国にいた人間が初対面だと思った人を前にこんなこと
を言うのだから。

「うん。覚えているよ。昨日あったよね？もう体は大丈夫？」

「はい。調子がいい時は出ないので……。それにしても、驚かないんですね」

「えっと……。正直最初見たときは驚いたけどね。女の子だったとは……」

「あ、あのー！ちょっといいですか！？」

急に、慌てたように智花くんが入ってきた。

「お、お2人はお知り合い……。なんですか？」

縋るような目で、昴さんに問いかける。

「うん。ほら、昨日智花にも話したよね？ランニング中に倒れてた男の子を介抱してたから遅くなったって……。それが慧だったみたい」

「あ、そ、そうなんですか……」

「うん。僕も驚いたよ。助けてくれた人がまさかこの学校でコーチをしているとは思わなかったからね。面白い運命のめぐり合わせだ」

あらかじめ、僕が酷い喘息持ちで酷いときは5分も走っていられないことは話してある。だから、昴さんとの邂逅もすんなり理解してくれた。

「それじゃあ改めて自己紹介しなくてもいいよね？早速練習始めようか……。と思ったけど」

昴さんの言葉に、みんなが注目した。

「慧も経験者らしいし、ここは3on3のミニゲームで慧の力とみんなの成長を見てみようかと思う」

なるほど。確かに、僕と言う新しいものが入ってきたら、いきなり練習よりも試合でどの程度の実力があるかわかったほうがいいと判断するのは賢明だね。でも、

「あ、あの。ちょっといいですか？」

「ん？どうした？」

「非常に厚かましいお願いだとは思ってますけど、出来れば1on1がいいです」

「え？でもなあ……」

さすがに難色を示すか。紗季くん曰く、智花くん以外は初心者であり多くのプレーが出来ず、唯一の経験者である智花くんは小学生とは思えない技術の持ち主だと聞く。技術に極端な差があるから、1on1では正しい能力がわからないと思っているのかも。

「紗季くんから、経験者である智花くんはかなり上手くて、他のみんなは限られたプレーしかできないと聞きました。それって、試合はチームワークでなんとか回しているってことですよ？そんな中で、誰がどんなプレーを出来るのか理解できていない僕が割り込んだら、逆に足手まといになると思ってます」

「う、そういわれれば確かに……」

「それに」

「それに？」

僕は智花くんの方に顔を向け、挑戦的な笑みを浮かべてから再び鼻さんと向き合う。

「強い人間と戦いたくなるのは、スポーツをしている人間では当たり前ですよね？」

この言葉が、決定打だった。

s c e n e . 3 恥らう慧（後書き）

次回、やっとバスケットに入れます……。

s c e n e ・ 4 王道VS邪道(前書き)

あまり上手くかけていないかも……ごめんなさい。

あ、言い忘れていましたが、この作品は2巻の初め。昴がコーチに正式に就任した直後あたりからはじまっています!!

scene . 4 王道VS邪道

「じゃあ試合は10分間。ゴール1回1点で5先取で勝利……で大丈夫だよね？」

「はいっ」

「大丈夫です」

別に断られてもよかつたのだが、僕が放った挑戦的な言い方で智花くんが火がついたみたいで凄くいい目で見えてきた。さらに、真帆くんたちは反対するどころか僕と智花くんが対決するのを見たいといった。しかも……。

「やれけつちん！！もつかんは強いぞー！！」

「ケイ！！しつかり！！トモも負けるな！！」

「おー。ともかもけいもがんばれー」

「け、怪我はしないように」

声援は五分五分だった。

じゃんけんの結果、僕がまずディフェンスをすることになった。

まず、ここでこの試合のルールをおさらいしておこう。

試合は1対1。ルールはバスケットボールの公式ルールにのっとり、昴さんが審判。

例外としてシュートは1本1点で、もちろん3ポイントはなし。ファウルによるフリースローはなし。

ハーフコートゲームで、オフェンスがシュートを決める、もしくはディフェンスがボールを奪うとコートの真ん中を横断するハーフラインの中央からスタート。

……こんな感じかな。

「それじゃ、スタートッ!!」

(注：試合は基本的に昴の一人称で進めます。あと、バスケの用語がでてきたら簡単な説明を【】内に入れますので、ご安心ください)

side . S

まさか、慧が自分から智花との1on1をのぞむとは思わなかった。まあ、みんなはかなり乗り気みたいだけど。彼……いや、彼女はアメリカのほうではストリートでバスケをやっていたからちよつとおかしなところがあるけど目を瞑って欲しいといっていた。さて、智花相手にどんな試合をするのか楽しみだ。

智花は慧の様子を見るようにドリブルはせず、腰の右側に両手にボールを持ったまま隙を窺っていた。一方慧は、ディフェンスの基本である両手を上げると言うことはせず、腰を落とした状態で同じように智花の隙を窺っている。そのディフェンスは隙が多いが、微妙な距離感を保っていて、シュートを打とうと構えればブロックを、抜こうとドリブルをすればコースを防げるような位置取りは完璧だった。

「さあ、おいで……」

挑発するように呟く。すると、智花はあの鋭いドライブで慧を右側から抜こうとする。慧はそれにバッチリと反応するが、そこから智花の本領発揮だ。

智花はすぐに反転すると、逆側に切り込み、慧を振り切ってレイアウトプを決める。相変わらず軽い身のこなしだ。

「おお！！さすがもっかん！！」

「へえ……ほんとに上手いなだね」

慧は、悔しがる素振りを見せずにそう言って笑った。だけど、その笑みは今までのさわやかな感じは残っているが、どこか遊んでいるような感じだった。

智1 - 慧0

今度は、慧のオフエンス。智花にボールを渡し、それを返してもらう。いわゆるワンタッチだ。すると智花とは正反対に、すぐにドリブルを突き出した。腰を落とさず。ゆっくりとボールをついている。もしかしたら、チェンジオブペース【ゆっくりとドリブルをした後、急に素早いドライブをして、相手のタイミングをずらす戦法】なのだろうか？

智花もそれをわかっているのだろう。ドライブを警戒して少し下がりが気味で構えている。

「そんなに離れて、大丈夫かい？」

慧が再びそう尋ねる。どうやら、慧は試合になると口数が多くなる性質なのかもしれない。

次の瞬間、ボールはゴールに向って放たれていた。

「えっ？ あっ！！！」

智1 - 慧1

智花も、そんなシュートとも思えないような行動に呆気にとられていた。

慧は、ドリブルをしていたボールが自分の手についた瞬間、それを片手の下投げで放ってシュートを打ったのだ。そしてそれに全員が釣られているうちに自分はゴール下まで走りこみ、リングには当たらなかったがバックボードに当たって跳ね返ってきたボールを空中で受け取ったままひょいとゴールを決めた。そして、地面に降り立つと振り向いて右手を上げた。

振り向いた彼女は、ニコツと笑う。

「これで同点だね」

「うおおおお！？ けっちんすげー！！！」

「あ、あんなやり方があったの？」

「おー。けいじょうず」

「か、かっこいい……」

コートの外で見学の4人はそれぞれ歓声を上げ、慧を褒める。俺も、かなり驚いた。ストリートの技を見るのは初めてだが、これだけはわかる。慧は、かなりやり慣れている。

智花は、キラキラと更に目を輝かせてさらに闘志を高めていた。

「それが、ストリートバスケット？」

「うん。言ったよね？ パフォーマンスのバスケットだっ」

再び両手を下げた形のディフェンスの構えを取ると、ニヒルな笑みを浮かべた。

「カツコよくそれでいて狡猾に。それがストリートだよ」

「それじゃあ、私はスポーツのバスケットで勝ってみせる！！」

こんどは、その場所からあの綺麗なフォームでシュートを放つ。完全に反応が遅れた慧は、飛び上がってブロックをしようとするが、ボールには届かず。綺麗な放物線を描いてボールはリングへと吸い込まれる。

再び歓声上がるが、慧は呆然と、ボールではなく智花を見ていた。

「凄い……綺麗だ」

その唇はそう、呟いているように見えた。

智2 - 慧1

慧のオフエンス。

また、ゆっくりとしたドリブルから始める。だが、これがチェンジオプペースなのか、それともシュートなのかはわからなくなった。だから、智花も距離を詰めてプレッシャーを与えることにしてみた。いだ。

智花が近づくと慧は左手を前に出して、右手でついているボールを守るようにドリブルをしている。

慧の手からボールが離れたタイミングを狙ってボールに触れようと智花が身をかがめた瞬間、再びシュートが放たれていた。

智2 - 慧2

俺は自分の目を疑った。慧は、信じられないような方法でシュートを打ったのだ。

智花が前に出ようと身をかがめた瞬間、慧はビハインドパス【ボールを持つているほうの手を背中に回し、逆側にパスを出す高等技術】の要領で、そのままシュートを打っていた。しかも、それはバックボードに当たってリングを一周した後、中へと吸い込まれていた。そしてまた、右手を上げて振り返っていた。

「ビハインドシュート。こんな技もあるんだよ」

「うおおおお！？ かつけー！ ねーねーすばるん！！ すばるんもあーゆーの出来る！？」

「いや……普通無理だろ」

一体どんな体の構造をしているのだろう。いやまず、あんなシュートを実現させていることに驚きを隠せない。

そして、智花のオフセンス。

「慧くん……どこでそんなシュート身に着けたの？」

「ああ。あつちでは僕は1番背が低かったからね。勝つために考えたのが、そういう手だっただけだよ」

そうニッコリ笑う。

今度は、智花はドライブで抜いてきた。慧もそれに食らいつき、なんとか着いて行くが如何せん智花のほうがスピードは上だ。初動が遅れた、慧を抜き去りまたレイアップを決めた。

智3 - 慧2

慧のオフセンス。

先の2回で、普通の考え方では慧の攻撃は止められないと判断した

智花は、なるべく近づいた位置で構え、決して自分からは行動しないようにする。

今度は慧はさっきのようなゆっくりとしたドリブルではなく、ボールハンドリング【ボールを持ち、体の周りを周回させる初心者がまず最初にやる基礎中の基礎】を始めた。腹回り、そして足を開いた間を前、後ろから通す8の字。

……行動がわからなすぎる！！

そして、右手から背中の後ろを通して左手に渡した瞬間急に動き出す。急に左足から踏み込んで智花の顔の右側に手を伸ばすと、そのまま手のスナップを利かせて更に逆側に伸ばしていた右手で受け取った後、そのまま後ろに跳んでフェイダウェイシュートを打つ。だが、それは惜しくもリングに弾かれた。

智3 - 慧2

ここで初めて、点数に差がついた。

scene . 5 決着（前書き）

この作品で慧がやっている技は、作者覚醒未遂が持っているストーリートバスケのゲームを参考にしています。

現実には実現不可で、挑戦しようとするフォームを崩してしまう上に体に思わぬ怪我を負ってしまう可能性もあります。よい子の皆さんは真似しないように。

あとすみません。すっごく短くなってしまいました！！

scene . 5 決着

side . S

「あっちゃあ〜。外したあ」

跳ね返ったボールは智花のもとへと跳んだので、そのまま慧のオフ
エンスは終了。智花はほっと一息つき、慧は少し大げさに頭を抱え
て天を仰いだ。

そして、智花のオフエンス。

余裕のできた智花だが、ここでペースを崩さずに一気に攻めて差を
広げにかかるところだろう。

また、智花の鋭いドライブ。だけど今度は慧もそれにバッチリ反応
してついていく。だが、それでは甘い。

「っ……………!!」

智花は鋭いドライブの勢いを一気になくし、ストップ&シュート。

慧は勢いに逆らえず、智花を置き去りにして自分だけ前に進む形で
追い抜いてしまう。

これでまた、智花がシュートを決めると思った瞬間。

「なっ……………!!?」

慧が、また俺達の度肝をぬいた。

シュート体制に入った智花を置き去りにした慧は、すぐに両手を地
面につき、足を逆立ちをするように振り上げる。智花の手からボー

ルが離れた瞬間、足で蹴ってソレをブロックした。

「うそっ!?!」

「おおっ!?!」

智花や、周りのみんなから驚きの声上がる。

でもな慧……

『ピッ』

「キックボール【足でボールを蹴ること。相手ボールからスタートする】」

それ、ヴァイオレーションだから。

なんとか智花のシュートを防いだ慧だけど、やっぱり一つ一つのプレイの動きが大きすぎるせいか息切れが早い。智花よりも荒い息をしている。

智花も、変則的過ぎる慧の動きに翻弄させられていつもより息が上がるのが早い。

再び、智花のオフエンスからスタート。

智花は今度は様子見をせずに最初からドライブで切り込んできた。

今まで最初は少しでもお互いに隙を窺っていただけあって、慧は驚いたような顔をして反応が遅れてしまった。

「……………なんてね」

かと思っただが、慧は脇を抜かれた瞬間後ろに飛んで仰向けに倒れこむと、その状態で智花のボールを弾いた。

おいおい、なんて危なっかしいプレイを……。あと一步でファウルだ。場合によってはインテンショナル【故意のファウル。フリースロー2本に加え、ファウルを受けた側からのスタート】をとられるプレイだろう。でも、慧は上手くボールだけに触り、すぐに体制を整えた後ボールを拾った。

智3 - 慧2

「いやホント、智花くんは強いね」

「慧くんこそ」

「これからもキミみたいな人といつでも戦えると思ったらわくわくするよ」

慧のオフセンス。智花が警戒して様子見をしているのをいいことに、慧は話し出す。

「じゃあそろそろ……」

ボールを腰溜めに構え、一気に加速した。

今まで、慧は驚かせるような技ばかりで真っ向からの勝負をして来なかった。それを俺は、慧が身体能力では智花に勝てないと思っっているからだと思っていた。けどそうじゃなかった。慧の身体能力は決して低いものじゃなかった。

その証拠に、そのドライブに智花は反応するのに精一杯だ。

線のスピードは智花の方が上だが、点のスピード 要するに

瞬発力は慧も負けてはいなかった。

そして慧は、智花について来られながらもゴール下までボールを持っていった。そしてフリースローラインとゴールの中間辺りまで行ったところでローターン。その勢いのまま、飛び上がり智花のブロックをすり抜けてシュートを決めた。

そしてまた、右手を上げて振り返る。

智3 - 慧3

それからは、一進一退を繰り返して、5点を上回ってしまい10分を過ぎたので引き分けとなった。

s c e n e . 5 決着（後書き）

感想お待ちしております！。

scene・6 邪道その弱点(前書き)

お待たせしました!!

今回は視点がコロコロ変わっています。申し訳ございません!!

それではお楽しみください。

scene・6 邪道その弱点

side・k

「はあ……はあ………智花くん。やっぱり、強いや」

「そんなこと、ないよ。私なんてまだまだ」

昴さんの試合終了の合図の後、僕と智花くんはお互いの健闘を褒め称える意味で握手を交わした。

息も絶え絶えな僕と比べて智花くんは、まだまだ余裕がありそうだった。僕が喘息のハンデを抱えているとしても、それを差し引いてもここにはやはりかなりの差があるみたいだ。

「2人ともお疲れ。……慧。大丈夫か？」

「はあ……はあ………？はい。大丈夫、ですけど」

「でも、息が苦しそう」

「おまけに呼吸の音も変だぞ？やっぱりアレか？」

ああ、そう言えば昴さんは知っていても他のみんなにはまだ言っていなかったっけ？

智花くんの言葉と、僕の異変に気付いたのかコートの外で見学していたみんなも心配そうに駆け寄ってくる。

「そうですね。……みんなには言ってなかったね。実は僕は酷い喘息持ちだね。酷い時は5分も走っていられなくなるんだ」

そう言うと、みんなは驚き大きな声を上げた。

「ええっ！？本当かけっちん！！大丈夫か！？」

「あ、あんたそんな病気抱えてトモと1対1しようなんて何考えてんの!？」

「ぶー。けい。むりしちゃだめ」

「そ、そうだよ。体のこと大事にしなきゃ……」

「ほ、本当に大丈夫!？苦しくない!？」

あ、あれ？みんなの反応が予想していたのと違うよ。もっとこう単純に驚かれたり、(ろくに練習が出来ないから)ガツカリされたりとかそう言う反応してくるかと思ったのに。まさか心配されるどころか怒られるとは思ってなかった。

「そつだよ慧」

「え？す、昴さん？」

後ろを向くと、少し怒ったような顔をした昴さんが腰に手を当てて立っている。

「そついうことは初めから言ってもらわないと。俺もそんなに酷いものとは知らなかったぞ。しかも酷い時は5分でダウンだろ？試合10分もやつちまったんだから。心配もするし、怒るのも当たり前だ。前もって言うてくれれば時間だって減らしたのに……」

「いやでも……今日は調子も良かったですし、引き際もわかりますし」

「そついう問題じゃない」

ビシッと軽く頭にチョップを落とされうぐつと呻く。でも、昴さんは構わず続ける。

「自分で調子がいいと思っても、急に悪くなったりすることだってあるだろっ？もしそれで試合中に倒れたらどうする？何も知らない

みんなはどう思う？それに、もし智花との接触の後に倒れたら智花は自分のせいだと責めるだろう」

ああ……そうか……。

「Oh sit……すみません。みんなも、ごめんなさい。そこまで頭が回らなかったよ」

思わず自分の至らなさに頭を抱えてしまう。僕は、もう一度みんなと向き合った。

「ごめん。そして心配してくれてありがとう。……こんな僕だけ、部活に入ってもいい……かな？」

少し自信がなくなってしまったので、だんだんと小さくなってしまったが。

「あつつつたりまえだつてのー！」

「そうね。ま、素直に謝ったから喘息黙ってたことは許したげるわ」

「おー。これから、けいも仲間」

「うん。これからよろしくね」

「もちろんだよ。仲間が増えて嬉しい」

……ただの杞憂だったようだ。

智花くんとの1on1が終わった後、やはりと言っかなんと言っか……質問攻めにあつた。主に真帆くんから。

内容はもちろん、僕のプレイを自分も出来るかどうかといったものだ。

「多分無理、かな」

「ええ〜！？いいじゃん教えてよ〜！！」

「ぶー。けちけちするなー」

「あはは、別にそういう意味で渋っているんじゃないからね……」

この2人はなかなかしぶとい。愛莉くんや紗季くん、智花くんは興味はあるがやってみたいとは思っていないようで、すぐに退いてくれたが、真帆くんとひなたくんはまだ食らい付いてくる。
う〜んこまったな……。

「そうだね。理由はちゃんとあるんだ」

「理由？」

「うん。まず、体がとんでもなく軟らかいのと体のバネがよくないと僕の使っている技は出来ないってこと。そうだね……ほら」

「うわっなんだ気持ちわるっ!？」

「おおー!？」

そう言っ僕が見せたのは、差し出した右手。それをもう片方の手を使わないで右手だけで指先を手首につけるといったものだ。確かに、90°以上曲がる手首は気持ち悪いね……。

「背中に回した手でシュート撃つたよね？あれは、ほとんど手首のスナップだけなんだ。このくらい曲がる軟らかさと、あと大人がやっているように片手で上からボールを持てるように出来ないは無理なんだ。だからごめんね」

「う〜んでもな〜……」

まだ諦めきれないのか、自分の手首をぐにぐに曲げている。
……さて、本当に困ったぞ。

「真帆。ひなたちゃん。慧の言うとおりこればかりは諦めた方がいい」

そこに昴さんが現れた。

「え〜！〜どうしてさすばるん〜！」

「そうだそうだ〜」

「ああいうプレイは、確かにカツコイイかも知れないけど犠牲も多いんだ。無理な体勢が多いから怪我につながることも多いし、シュートフォームも崩れる恐れがある」

昴さんが説得してくれるのはいいけど、これ絶対僕にも言っているよね？むしろ標的僕な気がしてならないよ。

「そうだね……悪いけど慧に実演してもらおうかな」

そんな感じに胸を痛めていたら、急に昴さんがボールを渡してきた。

「実演、ですか？」

「そう。試しに慧。その位置からジャンプシュートを撃ってみてくれないか？」

「えっと……ワンハンドですか？」

「そこはお任せするよ」

今いる位置はフリースローラインから少し下がった場所。そこから撃てというのだ。ジャンプシュートを。

ああ……あまりやりたくなかったんだけどなあ。説得のため。仕方

がない。

「はっ！！」

膝を曲げて撃ってみるが、久しぶりのジャンプシュートは違和感の塊でしかなかった。

s i d e . S

やっぱり。思ったとおりだった。

フォームはバラバラ。慧の放ったシュートはへろっとした、智花とは比べ物にならないような頼りない軌道を描いて

バックボードの2mほど上を通過した。

「あ、あれ？想像以上だ……」

慧さん。それはこっちの台詞です。

はっきり言って想像以上の酷さだった。その後も何球か打ってもら

ったがリングはおるかバックボードに1回も当たらないと言う、まさかワザとやっているのではと疑いたくなるような（ある意味）見事な結果を残してくれた。
真帆もひなたちゃんも、だんだんと羨望から諦め、最後には憐れみの視線へと変わっていた。

「けっちん元気出せ」

「おー。大丈夫。ひな、まだシュート届かない」

「うん。うん。……ありがとう」

経験者なのに初心者よりも酷い結果を残した恥ずかしさのあまりか、コートに突っ伏する慧を、2人は慰めていた。

ちよっとやりすぎたか。二人を諦めさせるためにやったことなのだが、逆に慧を傷つけてしまったらしい。でも、流石にこの酷さは放っておけないだろう。なんとか立ち直らせようと考えるが、いい案は思いつかない。相変わらず、自分の口下手さに嫌気がさす。

side . K

「けっちん元気だせ」

「おー。大丈夫。ひな、まだシュート届かない」

「うん。うん。……ありがとう」

みんな笑ったりはしなかったが、思いつきり慰められてしまった。今は逆に、その優しさが痛いよ。

恥ずかしくて、顔も上げられないくらいだ。

……やっぱり昴さんは気付いていたみたいだ。僕はあまりにああいったトリッキーな技にかまけすぎて、基礎のセットシュートが出来なくなってしまうのだ。ストリートで困ったことはないけど、公式の試合となると弊害は多いだろう。なにしろ、技の中には足を使ったりするのもあるし、それにモーションが大きい。

「そ、そう言えば……慧はシュートを決める度に振り返って片手を上げてたけどそれはどうしてなんだ!？」

コートに突っ伏していたら、昴さんが質問をしてきた。僕はなんとか顔を上げて答える。

「ええっと……ストリートの大会でダンクコンテストっていうのがあって、そのキメポーズ?みたいなものです。それ以来クセになっちゃって……」

「だ、ダンク!?もしかして出来るのか!？」

「はい。一応」

「ほんと!?ねえねえちょっとやってみせてよ!!!」

「え?ええ?」

わけのわからない間に、真帆くんは無理矢理起こされてしまった。周りのみんなも、期待の視線を送ってくる。

「……はあ。わかりました」

しょうがない。ここはいいところを見せて汚名返上といこう!..!

「ダンクコンテストでは、目的がダンクシュートを決めることだけなのでヴァイオレーション等はないんですよ。だからボールを持って歩いてても平気なんです」

ボールを持ったまま、ハーフラインに立った慧が説明を始める。

「評価はそのダンクと、そこに至るまでの過程の難易度、迫力、出来映えで決めます。……それではやってみましょう」

そして、慧は右手でドリブルをしだし。そして4、5回目くらいで3ポイントラインにたどり着くとビハインドパスの要領でシュートを打った。だが、今度はさつき智花と試合した時と違ってリングから軌道は逸れて、ふんわりとした弾道を描いている。それと同時に既に慧は走り出し、その勢いそのまま一気に飛び上がる。何故か、反時計回りに横回転しながら。バックボードに当たったボールは跳ね返り、それを右手でキャッチ。あいた左手でリングをガツチリ掴むと、回転していた体に力が加わったことで、リングを掴んだ左手を中心にぐるりと回る。そして1回転しそうになったあたりで体を持ち上げ、リングに背を向ける形でダンクシュートを決めた。

その姿は本当に……かっこよかった。

『……………』

しばし、俺を含めて全員がその姿に見とれていた。いつの間にか慧はすでにリングから手を放しており、ボールを持ってこっち側に近づいていた。惚けていた頭を何とかたたき起こし、言葉を出す。

「なんて言うか……その………すごくよかった」

「え？ほ、本当ですか！？」

「ああ！！な、なあみんな！？」

「やっぱりっちゃんすげー！！ありゃああたしには無理だなー」

「おー。さっきとは別人」

「うんうん。思わず見惚れちゃったわ」

「本当に、かつこよかったよ」

「凄いね！！私にはあんなこと出来ないよ！！」

正直、さっきまでこれからストリートの技は禁止させようかと思っ
ていたが……決めた。慧も、慧なりに努力をしてこの力を身につけ
たのだと、今のダンクを見てわかったから。

だから俺は、慧が慧なりにバスケットを楽しむことができるようにする
為、あえてそのプレイスタイルはそのままにすることにした。

s c e n e ・ 6 邪道その弱点（後書き）

感想お待ちしております！。

s c e n e . 1 球技大会（前書き）

すみません！！ 風邪引いてました！！

これからもがんばって更新しますので、よろしくお願いします！！

scene . 1 球技大会

プロフィール

【名前】掛樋〓C〓慧（かけひ〓クロード〓けい）

【生年月日】3 / 10

【血液型】A

【身長】158cm

【クラス】6年C組

【所属係】掲示係

【趣味】料理、裁縫、バスケ

【弱点】喘息。タバコの煙でアウト。

【座右の銘】大丈夫だ。問題ない。

「へえ、球技大会か。面白そうだね」

僕が入部した次の日。真帆くんたちから2週間後に球技大会があるという話を聞かせてもらった。先日昴さんにもそのことを伝え、作戦を考えてほしいと頼んだらしい。

……………水着エプロン姿で。

危なかった！！ 本当に！！
もう少し早く入部したら、危うく心にもものすごいトラウマを抱えるところだった。

「もちろんけっちゃんはバスケに出るんだろ！？」

「そうだね。可能なら出たいな。まだ」

「大丈夫だよ。美星先生から、慧くんに出たい競技を聞いてって頼まれたから」

そうか。そういうことなら大丈夫なのだろう。

「うん。じゃあバスケットボールにエントリーしようかな。僕が美星先生に直接言えばいいのかな？」

「別に私が言いに行ってもいいよ？」

「いや、こういうのは本人が直接言ったほうがいいと思ってね。ありがとう智花くん」

「ううん。気にしないで」

「それじゃあけっちゃん！！ 今度の週末から合宿だから、ちゃんと用意しとけよ！！」

「うん。わかったよ」

合宿かあ。きつとずっとバスケットをやってられるんだろうな。

.....ん？ 合宿？

「合宿！？」

「ぎゃっ……」

「ど、どうしたのよ急に!?!」
「ちよちよちよちよと待って!! 合宿というアレかい!?
何日か泊まるってことかい!?!」
「あつたりまえじゃん!! あ、トランプは持っていくから安心して
とけよ!?!」

そこじゃない。そこじゃないんだ……最大の懸念は。

「ど、どうしたの慧くん!? 顔色がよくないよ!?!」

「まずい。もしかしたら参加はできないかもしれないんだ」

「え? どういうこと?」

「僕の家族は兄さんが2人と父さんなんだけど、3人とも、その…
僕のことになるとすぐ口うるさくなるんだ。外泊なんて言った
ら……許可もらえるかどうか」

それ以外にも、僕が家を空けたらみんなのご飯がとても貧相なもの、もしくは3食すべて外食になってしまう可能性が非常に高い。
いや、ほぼ間違いないだろう。

「そ、そんなに慧の家族って厳しいの?」

「いや、厳しいと言うよりも心配性なだけなんだ。……時には、そ
ちのほうはややこしいこともあるよ」

「ま、まあとりあえず説得だけしてみたらどう……かな?」

「うん。がんばってみるよ」

「おー。けいがんばれー」

「　　っっていうことなんだけど………参加していいかな？」

今は夕食中。僕の家族は、どんなに遅くなろうともみんなそろってまで食えることができない。したがって遅くなる人にはかなりの重圧がかかり、必然的にみんな早く帰るようになるのだ。

夕食時を説得に選んだのは、みんなの機嫌が一番よくなる時間帯だからだ。

まあ説得は難しいだろうけど、僕は決してあきらめない。みんなと一緒に時間を過ごしたいんだ！！　何時間かかっても説得してみせる！！

「うん。かまわないよ？」

「まあそういうとは思ってたんだけど、でもやっぱりみんなとってえ？」

え？　今なんて言った？

「仲間と過ごす時間は大事だ。いっぱい練習してくるといい」「Really!？」

「ああ。ちよつど父さんは今週末に仕事の都合で遠くに出張する」となったからね」

「俺も仕事の研修が入ってな。泊りがけだ」

「俺は友達の家泊まるから大丈夫だ」

「え？　え？　そうなの？」

「ああ。だから何の心配せずに、楽しんで来い」

「嬉しい！！　I love you!　My father, and brother!!」

「はっはっは。父さんたちも愛してるよ」

早速、みんなに報告しないと！！

夕食を食べ終えた後、携帯電話を開いて教えてもらったURLに接続する。真帆くんたちに教えてもらった、交換日記だ。早速文章を入力する。

- 交換日記 (SNS) 03 - Log Date 5/18

ケイ

『やったよみんな!! 父さんも兄さんたちもすぐに許可くれた!!
! これで見んなと参加できる!!』

まほまほ

『やったなけつちん!! よしさっそくかくにんだ!! サキ、トランプちゃんといれたかつ!?!』

紗季

『え。ちょっと、合宿は金曜からだってば。準備なんて明日で良いじゃない。あ、でもトランプは用意してあるわよ。……もちろんまだ荷造りなんてこれっぽっちもしてないけれど! それより真帆! あんた荷物は自分で持てる分だけにしなさいよ。メイドさん同伴禁止。』

まほまほ

『たりめーだ！ せっかくのおたのしみなのにつるせーおごごといわれちゃたまらん！』

あいら

『ね、ねえ。やっぱり持っていてっちゃダメ、かなあ？……水槽』

紗季

『……だからそれは諦めなさいって。魚の方も迷惑でしょ。餌なら大丈夫だってば。家族を信頼してあげな。どうしても心配なら電話すれば良いから』

あいら

『う、うん……。ごめんね。あの子たちデリケートだから、不安になっちゃうの……』

ケイ

『確かに熱帯魚は水温とかに敏感だけど、きっと大丈夫だよ。っというよりも、ボク的にはどうやって持っていていこうとしたのか非常に気になるところだったけど……』

ひなた

『おー、大変だ。かばんが閉まらない。少しお洋服へらさないとかめかな。』

ばんつ、六枚で足りる？へらしすぎ？』

あいら

『まだまだ多すぎだよ……』。

上下二枚ずつ持てばきつと足りると思うけど……でも、汗かくだろうから少しは多めに詰めた方が良いかなあ？ みんなはどれくらい持って行くの？』

紗季

『……………ねー愛利、自慢?』

あいり

『えっ? どうして…………?』

まほまほ

『なーもっかん、けっちん。あたしらはなんまいもってく? とくに上のほう』

湊 智花

『0枚で良いんじゃない…………? どうせ……………必要ないもの…………』

ケイ

『そうだね。……………まず、持ってないし……………ね』

あいり

『あああっ! ち、ちがうの! わたし、そんなつもりじゃあ
っ!』

s c e n e . 1 球技大会（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 2 決闘と犠牲者（前書き）

今回は結構長くなってしまいました。

それではお楽しみください。

scene・2 決闘と犠牲者

- 交換日記 (SNS) 04 - Log Date 5/19

まほまほ

『ざけんなよっ！ もーサイアクだ！ なっとくできねーっ！』

紗季

『……はー。いい加減諦めなさいって。間違っちゃったものはしょうがないでしょ。いくらなんでも球技大会出場種目無し、ってわけにもいかないんだから』

まほまほ

『なしでいーだろ！ しまったこっちゃんー！』

湊 智花

『真帆、それはダメだよ……。クラスで仲間はずれって、良くない……』

ケイ

『そうだね。クラスの仲間なんだから仲良くしないと。でも……』

紗季

『あぁー……。そう言えばアンタもだったわね。ケイ』

あいら

『え？ ケイくんも竹中くんと……？』

ケイ

『いがみ合っているってわけじゃないんだ。ボクとしては仲良くしたいと思ってるんだけど……。どうやらボクが女の子だってことを黙ってたせいで気まづくなっちゃったみたいだね。あれ以来眼もあわせてもらえないんだ……。』

紗季

『確かにそうね。ケイは真帆とは違った意味でやっかいそう。でも、これは時間が解決してくれるんじゃないかしら？ 気楽に考えたほうがいいわよ』

ケイ

『うん。ありがとう』

まほまほ

『あああああああもー！ せっかくたのしみになっていたのにだいなしだっ！』

ひなた

『まほ、どうしてごきげんななめ？ もう、合宿楽しみじゃない？』

まほまほ

『そーはいわねーけどさっ！ でもほんとはもったのしかっただはずなのにっ！』

……きめた。やっぱとりかえす。たのしみヒヤクパーながっしゆくをちからずくでとりかえしてやるっ！』

あいら

『ま、真帆ちゃん……。あんまり危ないことしたら嫌だよっ』

ケイ

『そ、そうだよ？ けがでもしたら本末転倒じゃないか』

紗季

『……無駄よ愛利、ケイ。こうなったら私たちじゃ止められないわ、このバカは』

湊 智花

『昂さん……ごめんなさい。勝手なお願いだけれど、どうか助けて下さい……』

金曜日。昨日までは、今までで一番楽しい週末になると思ってウキウキしていたのだが一転。昨日の美星先生の連絡から気まずい週末へと変わってしまった。

原因はツンツンヘアーの男の子。竹中夏陽くん。

何故か彼は、真帆くんがバスケットをやり始めた辺りから、彼女への当たりが激しくなり、それに伴い真帆くんの反論も激しくなる。この悪循環が繰り返され、教室でも激しいケンカが幾度となく繰り返されていたのだ。

そして、そんな2人がこれから今日をあわせ3日間も一緒にいるというのだから一触即発どころか、もうすでに臨戦態勢となっている。

「……死ね」

「……てめえが死ね」

……………死ねなんて言葉は、気軽に使わないようにしましょう。
いや、気軽じゃなくても使わないように。

あつちでも見たことのないようなこの状況。2人は西部劇のガンマンの決闘如く、手に銃器を持って背中合わせに直立している。

「え、てか、なに、これ？」

声に振り向くと、ちょうど体育館に入ったところで昴さんが固まっ
っているのが見えた。僕、智花くん、愛利くんが、近づく。

「お、お疲れ様です。昴さん」

智花くんがぎこちない笑顔、というか苦笑で出迎える。こればかりはしかたないと思うけどね。

「……………智花、愛利、慧。……………ええと」

言葉が詰まるのも無理がないだろう。この状況。理由もわからず
に見るには刺激が強すぎる。

昴さんはそばにいる僕、智花くん、愛利くんを見た後、決闘の当
事者の真帆くん、いかにも『やりたくないけど強く頼まれて仕方な
く』といった表情で背中合わせの2人から数メートル距離を置いて
審判役となっている紗季くん、隅のほうに座りこの場にそぐわぬほ
んわかな声で『まほ、がんばれー』とちよつと場違いな歓声を上げ
ているひなたくんと視線を移す。そして、ものすごく困惑した眼で
再び僕たちに視線を戻す。

「……………ねえ、なんであの子が？……………なんで竹中が、ここに？」

さんざん溜めた末に、そう尋ねてきた。
智花くんと愛利くんが上手く説明できずに困惑し、目線を泳がせている。

「では、僕が説明しましょう」

「ぜひ頼む」

「実は昨日美星先生から連絡がありました」

だがそこで、第三者。真帆くんの声によってさえぎられた。つい
にあの修羅場が動き出す模様。

「待ったなしだ。サキが十を数えたところが合図。あとは先に振り返って、先にぶつ放して、先に一発でもぶち込んだ方が勝ち。文句ねーなっ？」

「くどい。いちいちルールなんか確認しなくて良い。さっさと始める。……で、負けた方が出て行く。それで終わりだ」

ついに始まってしまふみたいだ。できれば、どちらかが出て行くなんてことにはなつてほしくない。なにか方法はないだろうか……。

「……はあ。じゃ、行くわよ。」

1。

2。

3。

嫌々なのを隠そうともしない、眉間にしわを寄せたままの紗季くんがカウントを始める。

最早止める手立てはなく、ちらりと横にいる昴さんに視線を移してみるが、あごに手を当ててぶつぶつと言った後に、はっとなって頭を左右に振っているの僕と同じように、傍観に徹することになったのだろう。

「4。

5。

6。

」

すでに紗季くんのカウントは中盤を越え、そろそろ終わりそうなところ。彼女のカウントに合わせて徐々に徐々に近づいてくる真帆くんの顔は……絶対に関心を企んでいるであろう。したり顔だった。

「　　ところで。なーサキ、今何時なんどきでい？」

突然、真帆くんが決闘の途中にもかかわらずに、審判である紗季くんに時間を確かめる。

「フ……は？　何時つて、壁に時計あるじゃない。見ての通り……」

尋ねられた紗季くんは、訝しみながらもカウントを止めて時計を見る。

「えーと、今は四時十七分　　」

その瞬間。キラリと八重歯を覗かせた真帆くんが、

「ひひ、やっぱあたし天才っ!!」

本来のカウントを待たずに、紗季くんの口にした十という言葉に振り返る。

……とんち、なのだろうか？　これは。とりあえず、ズッコイ手だということだけは伝えておこう。

「　　え。ちょ、ちょっと!!」

「うわはははっ!!　死ね、ナツヒツ!!」

紗季くんの抗議も聞かずに真帆くんがフルオートで放ったBB弾の嵐が、夏陽くんに向かつて放たれる。それは白い白線となり、彼の体に襲い掛かると思われたが……。

「…………あれ？」

どうしたことが、白いプラスチック弾は夏陽くんを捕らえることなくコートに散らばることとなった。夏陽くんの姿は完全に真帆くんの視界からは消えてしまっていた。

「……………思ってたぜ、どーせてめえはまた下らねーこと企んでるだろうってな」

「……………っ！！」

その声の主、夏陽くんは僕たちが真帆くんのイカサマ戦法に呆然としていた間に、1人危機を察知して、スライディングかなにかで一気に距離を詰めたようだった。

「んにやるっ！！」

危機に顔を強張らせながらも、真帆くんは冷静に得物を下に向け

る。
少しタイミングが遅れてしまったが、ここで2人の武器の特徴を述べておこう。真帆くんはゴテゴテに装飾の施された、重くて小回りが利かないが連射能力と弾数に長じるアサルトライフル……………のエアガン。対する夏陽くんはシンプルな、小回りの利くハンドガン……………のエアガン一丁。

そんな、重量武器を持っている真帆くんが先に行動していた夏陽くん之間に合うはずもなく、彼の持つその銃口がしっかりと真帆くんを捕らえ、

「もうおせーっての。じゃーな、真帆っ!!」
「くくっ、そりゃどーだか」

すべてが終わると思われたが、それよりも一瞬早く、真帆くんのもつアサルトライフルのもう一つの銃口から、何かが吐き出された。

「グレネードっ!?!」

吐き出されたピンポン玉くらいのサイズのそれは、夏陽くんの顔面付近で炸裂する。

「ちよ、ちよっと真帆くんっ!!」

「って、そりゃいくら何でもっ!! ……え?」

いよいよ放っておけなくなり、少し走り出したところで、それが普通の戦略的殲滅武器ではない何かだと気づいた。2人を起点に四方へ飛び散ったのはBB弾や実弾ではなく………何故か黄土色の粉塵だった。

ちよっと香ばしく良いにおいを発する大量の何かの粉。

「ぐえほっ!! な、なんだこりゃっ!?!」

徐々にその範囲を広げつつある煙の中、粉まみれな憐れな格好に変貌した夏陽くんが叫ぶ。

「ぎゃははは!! もだえやがれっ!! 肺いっぱいにあたし特製の炸裂きなこ弾を吸い込んでもだえ苦しめえっ!! ……んで、消え失せろっ」

そうか、この黄色い煙の正体は黄な粉だったんだね。
……さて、みんなは2人の決闘に注目していて忘れていないか
もしれないけど、ここで1つかなり重大な事態が発生し始めている。
密閉された体育館。もちろん風なんかは吹いていない。したがっ
て、黄な粉は長々と空中を飛び回り続けて範囲を広げる。

「いーかげんにしろっ!! この大バカっ!!」
「あだっ!!」

紗季くんが真帆くんにむかってノート数冊を束ねて打ち下ろして
も、なお範囲を広げる。

したがって、真帆くん特製黄な粉弾を吸い込んでもだえ苦しんだ
のは……………」

「ぐっ、ごほっ!! ごほっ!!」

肺が弱く、重度の喘息持ちな僕だった。

「ぐっ、が……………かひゅっ、ごほっ!! ごほっ!!」
「け、慧!? おい大丈夫か!？」

はつきり言っつて緊急事態。

黄な粉たちは僕の気道から容赦なく肺にまで入り込み、呼吸器は
狭まり息ができなくなる。ひゅー、ひゅーと不快な音を立てた後、
自由に呼吸ができなくなるまで時間はそうは経たない。

ああ…………あれが炸裂した時点で早く体育館から避難すべきだっ
たな。

そんなことを思い、みんなの心配する声を聞きながら、僕の意識
は暗闇へと沈んでいった。

s c e n e . 2 決闘と犠牲者（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e . 3 喧騒の看病（前書き）

お待たせしました！！

それではお楽しみください。

scene 3 喧騒の看病

「慧っ!! しっかりしろ!!」

「大丈夫!? けっこうん!!」

「ああもう!! 波多野先生はいないし、どうすれば……」

また、迷惑をかけちゃったかな?

今、昴さんに負ぶってもらって女子部屋に運び込まれたところだ。

「み……みんな……」

「慧!? 無理してしゃべるな」

「だい、じょうぶ……だから……かばんの、中に……ポーチがある、はず。……とって、くれないかい?」

ひゅーひゅーと音を鳴らしながらも、何とか呼吸をしてそう伝える。

「ひょっとして……これ?」

愛利くんが、渡してくれた。

「あり、がとう。……えつと」

「まって慧くん。私が出すから。どれを探しているの?」

お礼を言ってそれを受け取ると、目的のものを探そうとする。けれど、智花くんが変わりに開けて探してくれた。

「白の……プラスチック製の吸引機……ごほっごほっ……あと、……半透明の、シールと……赤い錠剤……」

「えっと……これだね？」

それらは全部、喘息の発作を抑えたり出にくくするためのものだ。まず最初に、吸引機を渡してもらい、中に入っている薬を吸い込む。

「けほっ……けほけほっ……」

「だ、大丈夫!？」

「うん……少し楽に、なったよ」

次はシールだ。ちょうど気管支の上あたりになるようにそれを張る。張ったところが少しスースーして気持ち良い。

そして最後は錠剤。夏陽くんが持つてきてくれたコップを受け取り、一錠飲む。もうずいぶん発作も楽になってきていたので、ちゃんと飲むことができた。

飲んだ後、上手く体に力が入らないので布団に横たわる。昴さんが優しく毛布をかけてくれた。

「すみ、ません。……ご迷惑を、おかけして」

「何言ってるんだよ。迷惑なんかじゃない」

「は、い。……疲れたので、少し、寝……ます」

「……
だろ!?!」

「だと！？　そもそも　が　」

「う……………ん」

「あ、けっこう起きたか……………？」

喧騒に、目を覚ました僕の視界に入ってきたのは、険悪そうな雰
囲気はそのままだけど心配そうにこつちを伺う真帆くんと夏陽くん
の顔だった。

「2人とも……………」

「おい、まだ起きるな！！」

「そうだよけっこうん」

上体だけでも起こそうと思ったけど、2人に押さえつけられてし
まった。

なんだか、申し訳ないと言う気持ちしかわいてこない。

「2人とも……………どうして？　練習は？」

「紗季が、あたしたちがけっこうんに迷惑をかけたんだから……………」

「2人でしっかり看病してろって」

「そっか、ありがとう。……………その割にはずいぶん盛り上がっていた
みたいけどね」

「……………」

笑って言った僕の皮肉に、2人は気まずそうに視線をそらした。

……………ふふ。仲が良いのか悪いのか。

「……………ごめんね。迷惑かけたね。僕のせいだ」

「ち、ちげーよ！！　そもそもコイツが黄な粉なんて使ったから……………」

……………！！！！

「テメーがケンカぶっかけてくるからいけねーんだろ！！！！」

「なに!?!」

「やるか!?!」

「ちょ、ちょっと2人ともおちつ

ごほっ!?!ごほっ!?!」

「だ、大丈夫!?!」

「しっかりしろ!?!」

「はあ、はあ……もう、大丈夫だよ」

薬を飲んだし、十分に休んだのでもう全然苦しくない。

「2人が気にすることじゃないよ。そもそも僕が避難するのが遅すぎたのが原因なんだから………ね? 僕は大丈夫だから、練習に参加して」

「いや、でも……」

そう促してみたけど、2人とも動く気配がない。

「本当に大丈夫だから」

「だって……」

「……そうだね。じゃあ、夏陽くんに残ってもらおうかな? 真帆くんは、練習に参加して」

「でも……!?!」

「大丈夫。ちょうど、夏陽くんと2人で話したいこともあったから……お願いするよ」

「………わかった」

ものすごく不満げに、渋々といった様子で真帆くんは立ち上がり扉を開ける。

と、出ていく寸前に夏陽くんを振り返った。

「ナツヒ!?! けっちゃんに変なことするなよな!?!」

「なっ！！……す、するかバカ真帆！！」

夏陽くんの返事も聞かず、真帆くんはさっさと出て行ってしまった。部屋には、僕と夏陽くんが残される。

……ごめんね、真帆くん。仲間外れみたいにしてしまった。

でも、今じゃないと……夏陽くんとじっくり話せる機会が無さそうだから。

s c e n e . 3 喧騒の看病（後書き）

感想お待ちしておりますー！！

s c e n e . 4 凝りの消滅（前書き）

更新ですー！！

ちょっと急展開すぎかも知れませんが、これが覚醒未遂の力です。
ごめんなさい。

そして、前回以上に短いです。

scene・4 凝りの消滅

「……………」
「……………」

き、気まずい…………。

さつきは真帆くんにああ言ったけど、いざ2人きりになってしまつと何から話せばいいのかわからなくなつてしまつ。それに、真帆くんがいなくなつたら、夏陽くんがまたそっぽを向いてしまった。まあ、すぐに俯いてしまった僕が言えたことじゃないかも知れないけどね。

でもせつかく真帆くんが気を使つてくれたんだから、がんばらないと。何時までもこうしてはいられない。

意を決して息を吸う。

「「ごめん!!…………え?」

あ、あれ?

「ど、どうして夏陽くんが謝るんだい?」

「それはこっちのセリフだ!! 慧が謝るようなことなんかねーだろ!?!」

「いや僕は、女の子だと言つたことを黙つていたことを謝ろうと…………だって、そのせいで夏陽くんにイヤな思いをさせてしまったでしょ?」

「ん、んなこと…………ねーよ」

「でも、それで気まづくなつちやつたでしょ? そのせいで話しかけてくれないのになつて…………だからごめんね」

「あゝも〜!! だから〜!!」

わしわしと頭を掻きながら、夏陽くんは立ち上がる。

「そんなのカンケーねーんだって!! 話しかけられなかったのは単に俺が悪かったんだよ!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が悪い!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が!!」

「いや、僕が……」

「だから俺が!!」

「……ぷっ」

「アツハハハハハ!!」

「ハハハハ!!」

思わず、2人で同時に笑ってしまった。

「ふふ……何か変だね。僕たち」

「そうだな。もう、どっちが悪いとかなしでいいよな」

「うん。……ふふふ」

「あっ……」

どうしたのだろう？

夏陽くんが赤くなって黙り込んでしまった。

「夏陽、くん？ どうかした？」

「いいいいや!! 何でもない!! 何でもないぞ!!」 (言えね

え……笑った顔がすげえ可愛かっただなんて……)

「?……そう。ならいいけど」

……あれ？　なんだかまた気まずい雰囲気になってきた。

お、おかしいな……………もう解決したはずなのに。な、なんで夏陽くんは赤くなって俯いているの？

ひょっとして……………。

「んっ……………」

「うおわっ！！　きゅ、急に何するんだよ！！」

「ご、ごめん……………顔が赤いから熱でもあるのかなって」

「だからっておでこをくつつけるなよ！！　ビツクリするだろ！！」

「ご、ごめん……………」

「それに……………そ、そもそも熱なんてねーし……………ああ赤くなくてもねー

……………」

「え、で、でも……………」

「……………」

「ご、ごめんなさい」

夏陽くんに半目で凄まれてしまった。

s c e n e ・ 4 凝りの消滅（後書き）

やっぱり短すぎですかね？

短いを頻繁にするか、長いの間を開けて投稿するか悩んでおります……。

s c e n e ・ 5 修羅ふたり（前書き）

おひさしぶりですー！！

ここのところ立て込んでおりまして……やっと更新できました。
今回はいつもよりもちょっとだけ長めですので、楽しんでいただければ幸いです。

それでは、お楽しみください。

s c e n e . 5 修羅ふたり

その後、練習が終わった昴さんたちが訪ねてきてくれた。
みんな僕のことを心配してくれていたみたいで、もう大丈夫だと
伝えるとほっと一息ついていた。

- G i r l s t a l k -

慧

「みんなごめんね。ご心配おかけしました。発作も治まったし、も
う大丈夫だよ」

愛莉

「そう？ よかった。倒れた時は本当にびっくりしたから」

紗季

「……うん。顔色もいいし、無理はしてないみたいね」

慧

「ははは。信用ないな……」

ひなた

「ぶー。けい、すぐむりする」

智花

「でもよかった。明日から、部活参加できる？」

慧

「うん。できるよ。回復は早いほうだから」

紗季

「そう。それならいいわ。………で？ 真帆を追い出した、ナツ
ヒとの逢瀬はどうだった？」

愛莉

「えっ!？」

智花

「まさか2人って……」

慧

「ななな何言ってるんだよ!! 夏陽くんが僕を……そ、そんなわけないじゃないか!!」

紗季

「ほほう。夏陽くん“が”、ね……」

慧

「……………」

紗季

「良かったわねトモ。強力なライバル（容疑だけだったけど）が減つて」

智花

「ふええ！？ な、なんで私なの……………」

「あー！ こら真帆っ、私のトマトっー！！」

「へへん、やらねーよっ！！」

「あ、あれ？ ここ、登れないよ？」

「おー。あいりのとかけ、変な動き。かわいい」

……………なんでこうなった？

僕たちは今、宿泊小屋にあるテレビに向かいゲームを興じていた。突然昴さんがそれらを抱え込み、夕食前にみんなでやるうと言ってきたのだ。まあところどころ、使い古された感のあるそれは、恐らく美星先生の私物なのだろうけど。

元来ゲーム好きらしい真帆くんを中心にしだいとみんな熱中し始め、最初は乗り気じゃなかった夏陽くんも、なんだかんだで真帆くんと一緒に楽しんでいる。……あれ？ この2人ってケンカの真っ最中じゃなかったかな？

それに、ゲームも2対2の対戦アクションゲーム（と、真帆くんが言っていた）。もしかしたら、これが昴さんの狙いなのかもしれない。現に、真帆くんと夏陽くんはタッグを組んで紗季くん・愛莉くんを絶妙なコンビネーションで完膚なきまでに叩きのめしているし、それを見た昴さんもちよっぴりしたり顔だ。

ちなみに僕は、みんなの遊んでいるところを見学中。理由は、ゲームをやったことがないからだ。

「いよっしやあ3連勝！！ よーし次こいやあ！！」

紗季くんと、愛莉くんが使っていたキャラクターの体力ゲージ（と言うらしい赤いバー）がゼロになり、勝利を収めた真帆くんが大きくガッツポーズ。

「わーい。あいいり、交代。よし、ひなもとかげ使おうっていう」

「こーらひな。ちよっと待ちなさい。……ねートモ、ケイ。そろそろ大体のルール分かったでしょ？ やってみない？」

「えっ？」

「僕もかい？」

コントローラーに飛びつこうとしたひなたくんを制した紗季くんが、昴さんの横でにこにこことみんなを見守っていた智花くんと、すぐ近くにいた僕に言ってきた。

智花くんも僕と同じくゲームをやったことがなく、見学に回っていたのだ。

「……で、でも私、本当にやったことないしつ。きつと、足引つ張つちやうよ」

「僕も、こういうのは経験ないから……。それに見てるだけでもけっこう楽しいし」

「そんなことないよ智花ちゃん。私もへたつぴだもん」

「ケイも、見てるよりやったほうが楽しいわよ。バスケットと同じ」

「こいよもつかん！ けっちん！ きひひ、手加減はしねーけどなつ……」

「ともか、けい。とかげ使って。とかげがおすすめっていう。かわいすぎっていう」

「……早くしろよ、湊。それに、慧。バスケット以外の勝負は自信がなくて逃げるのか？」

夏陽くんにそう言われ、ついむっとしてしまふ。でも、紗季くんの言うとおりなのかもしれない。こういう時には、やってみるのも悪くないかも。

「……それに、彼に挑発されて引き下がれるような僕じゃないしね。」

智花くんも、参加する決心がついたみたいだ。

まあ見よう見まねだけど、精一杯楽しむとしようかな。できれば勝ちたいけど。

「えっ？ あ、こつち！ きゃあ！ えいっ！！」

「智花くんこつちだ！ そう！ よし挟み撃ち！！」

10分後、そこには修羅が居た。しかも2人。

目の前で繰り広げられているのは、ついさっきまでコントローラに触れたことすらないような少女2人が、戦場を掌握しきっている悪夢の如き景色。

そう。この状況を語るに一番ふさわしい言葉は悪夢としかいいようがなかった。特に、多少なりともゲームに心得のある人間にとつては。

何せその片割れは、一切のテクニクや応用的な操作知識を知らないまま、純粋な反射神経と動体視力だけで経験者の腕前をはるかに凌駕。もう片方は、見よう見まねから始まったテクニクを、持ち前の学習能力の高さで独自に応用し、経験者が何時間もかかって身に着けるような高等技術を使いつつ、相棒のサポートにまわり裏でゲームを操っていた。

小学生としては規格外のバスケットボール選手、湊智花と掛樋

Ｃ 慧は……その実ゲームの世界でも規格外だったらしいのだ。

「あれ、終わり？ やった、よくわからないけどまた勝っちゃったみたい……！！ あははっ、面白いねこれっ。次やるう次っ！！」

「そうだね。いろんな戦略立てられたりするからすごく楽しいよ！
さあ、もう1回！！」

「……………どうしてこうなった。」

今回の目的である、ゲームで真帆と竹中を仲良くしようというプランを一緒に考えたはずの智花はそれを忘れ興奮。恐らく俺の目的を察していたであろう慧も、ゲームの楽しさに目覚めたらしく、智花と手を取り合っていた。

「……………」

これで真帆・竹中ペアは8連敗。本来負けた方はメンバー交代をする約束だったが、プライドをズタズタにされて意固地になった2人はコントローラーを離そうとしなかった。むしろ、紗季や愛莉、ひなたちゃんまでもが2人の恐ろしさに戦慄しつつ、鮮やかな勝ちっぷりに見惚れていた。

これはまだいい。問題は……………。

「……………おい。なんで作戦通り挟み撃ちができねーんだ、この下手糞」

「あ？今のぜってー追い立て役のミスだろド下手糞」

敗北を重ねるにつれて2人の仲がどんどん険悪に戻ってしまっていることだ。

臨界点まで、残り数秒。

「……………」
「……………」

長い沈黙、にらみ合い。

俺はたとえ1人でも何とか状況を打開したかったが………あ、もうダメだ。

「　　こんんんのっ」

「　　野郎ッ！！」

瞬間、開幕する取っ組み合い！　いち早く危機を察した紗季と愛莉と俺が間に入って、比較的すぐに2人を引き剥がすことには成功するが、それでももう修復しかけた関係はすっかり水の泡だった。

「　　………あ、あれ？」

「　　………これは、一体？」

画面に熱中しすぎて周りが見えていなかった2人が部屋を駆け回る怒声によって我に返り、ぎゃあぎゃああと喚く2人と部屋の惨状を見て呆けた声を出した。

夜の終わりは、まだまだずっと先になりそうだった。

s c e n e ・ 5 修羅ふたり（後書き）

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 6 再び……（前書き）

昨日（日曜）は更新できなくてすみません！！

書いた話を保存する前にインターネット回線を閉じるといつドジを犯してしまいました……。

それではみなさん、お楽しみください。

scene・6 再び……

「ねえよ、んなもん!！」

「嘘つけっ!! ナツヒがあたしに嫌がらせして止めてるんだろっ、ハートの5っ!！」

次に、昴さんが取り出したのはトランプだった。これならむやみにヒートアップせずに、みんなで和気藹々とできると思ってたの選択だろう。

トランプという選択肢は非常によかったのだが……やる種目を大きく間違えてしまったようだ。何気なく始めた七並べは、疑心暗鬼を生む魔性のゲームと化していた。

「くそっ、最悪だこいつ……。あたしに勝たせたくないからってアガリよりも邪魔ばっか狙ってさ!！」

「……てめえ、いい加減にしろよ。言いがかりもっ」

ああ、最初はあんなに和気藹々とした雰囲気だったのに……。現状では仲直りどころか、一触即発の冷戦状態がずっと続いている。しかし誰なのだろうか？ ハートの5が止まっているせいで、誰も出せない状態がずっと続いている。まあ確かにこの冷戦状態のなか、今更出せないというのも無理ないけど。それにしても、せめてジョーカーを持っていてる人も出せば状況も動くはず……。って、こっちも同じ理由で出し辛いのか。それでも、この空気は非常に居た堪れない。いつの間にか、僕はみんなの一挙手一動を観察し、犯人探しみたいなことをしていた。

「……え、えつと。パスです、ごめんなさい」

蚊の鳴くような声で、愛莉くんが自分の番を飛ばした。

彼女も違うみたいだ。だれだろうな、ハートの5、もしくはジョーカーを持っている人は……。

「んしょつと……ん？」

「おー。けい、どうかした？」

隣に座っていたひなたくんが声をかけてきた。

「あ、いや……なんでもないよ」

そう、別にたいしたことはない。

みんなも、こういう経験はないだろうか？ 今、僕たちは車座になって足元に座布団を引いて座っている。最初、真帆くんがトランプを一枚一枚飛ばしてに華麗(?)に配ったんだ。そしたら……ね？ 大体わかるだろう？

何気なく体制を変えようとして座布団に手をかけたときに……ね？ 触れてしまったのだよ……畳との間にあるプラスチック製の薄いカードに。

ははっ。はははははははははははは。

どうしよう。

僕に勇気が足りなくて、座布団をめくることができないので確認はできないが十中八九ハートの5、もしくはジョーカーだろう。

犯人は僕だったみたいだ。これがもしハートの5とかだったら洒落にならない……。みんな、ごめんね。疑ったりして。そして今ハートの5、もしくはジョーカーを持っている人………気持ちが悪くわかりました。

「あ、あの。昴さん、やっぱりどうかされましたか……？ 少し、顔色が……。もし体調が優れないようでしたら、お願いですから無理しないで下さいね？」

智花くんの声に顔を上げると、自分の持ち札を凝視しながら顔を真っ青にして固まっている昴さん。汗の量も普通じゃない。……いや、あれは冷や汗か。どうやら昴さん。あなたは僕と同じ道をたどっているようですね……。

「慧くん？ なんだか慧くんも顔色悪いけど大丈夫？」

「はっはははは。だいようびだ。もんでいねい」

「おー。けい、かみかみ」

やはりここは、素直に謝罪すべきだろうなあ……。そ、それに日本には罪を憎んで人を憎まずというすばらしいことわざもあるじゃないか！！ うん、わけを話せば、みんなきつと許してくれるだろう。正直に謝ろう。……次の順番がまわって来たら。

自分の優柔不断さが憎いッ！！

いやいや、そこは普通に今謝るべきだ。後に伸ばしていいわけがない。むしろ悪化するに決まっている。昴さんもカードを握り締め、覚悟を決めた男の顔になっているし……。謝るなら、ここだ。

「あーっ！ やっぱナツヒ持ってるっ！！ 今見えたハートの5っ！！」

その時、真帆くんが立ち上がって、夏陽くんを指差した。

「はあっ!?! 持ってねーよ!!! ってかなんで人の手札覗いてんだよ!?!」

濡れ衣を着せられた夏陽くんも立ち上がり、声を荒げて真帆くんを睨んだ。

「嘘だ嘘だっ! 赤いの見えた! 違っってんなら持つてるカード全部見せてみる!?!」

「馬鹿か!?! まだ途中なのになんで見せなきゃいけないんだよ!?!」

「ほらそーやってごまかすっ! やっぱり持つてるんだ!?!」

「このっ!?!」

「っ! 止める、さわんなっ!?!」

「うがー!?!」

「ぐがー!?!」

……そして、再び取っ組み合い。

みんなで必死に引き剥がした後、僕と昴さんは深い深い溜息をついた。

トランプも徒労に終わり、ますます2人の関係は悪化しているけど、お腹が空いては何もできない。とりあえずみんなで夕食を作ることになった。

「……それで、どうしてカレー？」

「多分、お泊りの定番メニューだから、じゃないかな？」

僕が何気なくつぶやいた疑問に、愛莉くんが答えてくれた。

「そういうものなんだね……ありがとう愛莉くん。教えてくれて」

「ううん。いいよ。アメリカでは、こういうことなかったの？」

「転校も多かった僕は、学校の友人だけでお泊りなんてほとんどしたことがなかったから、そういう定番メニューとかはわからないんだ。家族同士とかなら何回かしたことはあるけど、そういう時は大抵バーベキューだったからね」

「バーベキューかあ……それも楽しそうだねっ」

「ふふ、そうだね」

ひとしきり笑った後、智花くんの指揮下へと入る。何故だかはわからないが、昴さんに一任された智花くんはすごく張り切っているし、僕としても初めてみんなと作る料理……。楽しく、そしておいしく作れたらいいなと思っていた。

「そ、それじゃあ真帆と竹中君はルーを作ってもらおうかなー！

真帆、はいカレー粉っ！ これをフライパンで煎って香りを出してね。竹中君は、この小麦粉とバターを

「……粉？」

「……粉」

材料を手渡された2人が、その手元と隣に立つ憎き宿敵を交互に見やる。

「……えっ？」

そして。

『 粉！！』

その後、僕の記憶はない。夜中に目覚めた僕は、土下座する真帆くんと夏陽くん。そして2人の頭を拳骨で何度も叩く紗季くんに状況を説明してもらった。

あの瞬間、2人の手の内にあつた小麦粉とカレー粉はぶつかり合い部屋の中を隙間なく覆い、僕は再び激しく咳き込んで倒れたそう
だ。

ちなみにその後、僕以外のみんなは粉まみれになつた小屋の掃除に追われ、夕食は肉入り野菜炒めとなつたらしい。

紗季くんが作ったという野菜炒めは、すごくおいしかった。

た。

s c e n e ・ 6 再び……（後書き）

原作読んでいて思ったのですが、ジョーカーは誰が持っていたのでしょうね？

もしかして、七並べにジョーカー入れるのって地域ローカルってやつですか！？

s c e n e 7 慧の朝餉（前書き）

はいっ。更新です。

短いですがご勘弁くださいませ……。

scene 7 慧の朝餉

「フーンフーンフーンフーンフーン……フーンフーンフーン
フーンフーン」

「何でアメリカ国歌」

振り返ると、夏陽くんが腰に手を当てて呆れるように立っていた。

「ああ、夏陽くん。おはよう」

「お、おう……」

「随分早いお目覚めだね。よく眠れた？」

「まあな……」

照れたように頬を掻く夏陽くんから目を離し、再び視線を前に向ける。

「っていつか、お前こそちゃんと寝たのかよ？ こんな朝早くから………今5時半だぞ？」

「いや、昨日はお陰様ですっと寝たままだったからね。いつもより早く目が覚めたんだ」

「ぐっ………そうかよ」

彼の気まずそうな声に思わず小さな笑いがもれる。作業を手を動かしながら、続けた。

「それもあるけど、本当はいつも起床時間はこのくらいだから気にしないで。……あ、もうそろそろ出来上がるから、食べる？」

朝食

「えっ？ ……いい、いいのか？」

いつもはハキハキとした、遠慮という言葉を知らないかのように話すのに、戸惑ったような声なんだかおかしくてまた笑ってしまった。

「ふふふ……遠慮しないで。むしろ、みんなのために作ったんだから。コンビニの菓子パンやおにぎりだけじゃお昼までもたないですよ？ ……まあ、大したものじゃないけどね」

「そ、そうか。……………んじゃあお言葉に甘えて」
「うん。じゃあ座って。すぐに用意するから」

背中を向けているから見えないけど、床を椅子が擦る音が聞こえたので座ってくれたことがわかった。その事がちよっぴり嬉しくて思わず頬が緩んでいることに、僕は気づいてなかった。

10分後、夏陽くんの目の前に今日の朝食が並んだ。白米、ジャガイモの味噌汁、ニンジンの浅漬け。あと、肉と玉ねぎの味噌炒めだ。所詮昨日の夜の余り物から作ったものだから大したものはない。まあ、なぜか味噌とか塩とかその他諸々、基本的な調味料があったのがラッキーだったかな？

「ごめんね。有り合わせだから大したもの作れなかった」

「い、いや……十分、旨いぞ」

「そう？ それならよかった。遠慮しないで食べてね」

ありがたいことに、夏陽くんは文句も言わずに黙々食べてくれた。

夏陽くんが使った食器を片付けた後、お茶を飲みながらのほほんとしていた。朝は、やっぱり慌ただしいのよりものんびりしたほうが好きだな。我が家の男性陣はみんな寝坊助だから、僕が起こさないといつも慌てて出かける準備をするはめになる。……………みんな、ちゃんと起きられてるかな？

「あれ？ 慧くん？」

心配になって、電話の一本でも入れようかなとか思っていたら、控えめな声が聞こえてきた。振り返ってみると、ドアに手をかけた状態で固まっている愛莉くん。

「おはよう愛莉くん。よく眠れた？」

「う、うん。おはよう。慧くん早いね」

「まあいつもこのくらいだからね。……………みんなはもう起きた？」

「あ、うん」

「おつはよーけつち……………つてうお！？ なんだなんだ！？」

「こ、これ……………ケイが用意したの？」

「おー。おはよー」

「うわあ……………いいにおい」

「ああ慧、おはようって……………なんだこれ？」

愛莉くんの後ろから、みんながやってきた。

視線の先はテーブルの上。実は、夏陽くんが使った食器を片付け

て少し経った頃に、そろそろみんなが起きてくるかなと思って人数分を並べておいたんだ。それを見て、驚いているようだった。

「余計なお世話かもしれないけれど、みんなの朝食を作らせてもらいました。菓子パンやおにぎりだけじゃお腹が空くだろうし、栄養も偏りますからね。大したものがないで申し訳ないですが……」

「余計なお世話なんかじゃないよ。いやあすごく旨そうだ!! ありがとうな、慧」

「いえ。お気になさらず」

昴さんがお礼を言うとともに、頭を撫でてきた。うっん…………前から思っていたけど、昴さんって頭を撫でるのが好きなのかな？ お礼を言う時や、褒めたりする時はほとんど必ずと言っていいほど頭を撫でてくる。別に嫌な気持ちにはなりはしないんだけど……正直ちょっと子ども扱いしすぎじゃないか？ まあ、彼にとっては僕たちなんかは子供なんだろうけど。

「さあ、みんな食べて!! 体力つけて練習がんばろう!!」
『おー!!』

いただきます。と一声かけて、料理に手を出していく。ふふ、やっぱり人数が多いとにぎやかになっていいな。

「うまー!! けっちんの料理最高!!」

「おー。にんじんおいしい」

「そうかい？ お世辞でも嬉しいよ」

「そんなことないよ。本当においしい。羨ましいなあ……私、お料理へたつぴだから」

「悔しいけどホントにおいしいわ。確かケイって毎日家族の食事作ってるんだっけ？」

「うん。家の家族は全員料理できないから」
「そりやおいしくもなるわけだわ……」
「ううこの味噌汁も、漬物も……炒め物もおいしい……」
「まずいわよトモ。これは点数高いよ？」
「ううう……」

みんなの言葉が、食べて笑顔になってくれるのが純粹に嬉しい。でも、なぜか智花くんが落ち込んでいて、紗季くんがニヤニヤしているのが気になるな……。嫌いなものでも入っていたのかな？

ふと、テーブルの端に座っている昴さんに目を向けると、彼は黙々と食べていた。

「どうですか昴さん。お口に合います？」
「ああ。とつても旨いよ！！これ、昨日の残り物、だよな？」
「はい。もつたいなかったので、使わせてもらいました……だ、ダメでしたか？」
「いやいや、そんなことはないぞ！！この味噌汁なんかすごくおいしい。慧はいいお嫁さんになるな」
「お、お嫁さんだなんてそんな……僕なんて誰も貰ってくれませんかよ」

また、頭を撫でられてしまった。思わぬ一言を言われてしまい、顔の温度が急激に上がってしまうのがわかる。

それに、

若干みんなの（なぜか）羨ましそうな視線が気になった。

s c e n e 7 慧の朝餉（後書き）

ちよつと、自分を卑下しがちな慧でした。

やっぱり朝食はしっかり摂らなきゃですよね！！

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 8 氷の絶対女王政（前書き）

はいつ。更新です。

楽しんでいただければ幸いです。

scene・8 氷の絶対女王政

ジャー…………カチャ、カチャ……………キユツキユツ。

みんなでワイワイと朝食を食べ終え、何度断っても引き下がらずになぜか粘り続ける智花さんと一緒に食器を片付けていた。

「ありがとう。手伝ってくれて」

「ううん。せめて私もこのくらいはやっておきたいから……………」

僕が洗った食器を、智花くんが拭いて棚へと戻していく。上のほうにある食器も使ったので、僕よりも上背が低い智花くんがそこへ食器を戻すのは少々危ないのではないかと思ったけど、近くに踏み台もあったので大丈夫だった。

「やっぱりこつという細かなところでも手際が違うね……………家事とか全部自分でやってるの?」

食器を洗っている僕の手を見ながら、智花くんがそう尋ねてきた。

「うん。みんな忙しいからね」

「えっとその……………慧くんのお母さんって……………」

「え?」

ぎくり、と。心臓が鷲掴みされた気分だった。

「あ、じ、じめんなさい!…」

僕の動きが止まったのを見て、触れてはいけない話題に触れてしまったのだと思ったのだろつ。智花くんは申し訳なさそうな顔をして謝った。

「うっん。気にしないで」

そういつて笑ってみたものの、鏡を見なくてもわかる。上手く表情が作れていない、ぎこちない笑顔に違いなかった。

あの人の話題は……して欲しくなかったから。

「今のお前にバスケで勝つても、当たり前すぎて決着にならねーんだよ。そんなの俺が納得できない。だから、バスケでケンカ売らんなら、もっと上手くなってからにしろ」

智花くんと共に、遅れて体育館にやってくると、足元からボールを拾い上げ、真帆くんに強く投げ渡した夏陽くんがそう言っていた。反射的にボールを受け取り、そんな思いもよらない言葉を掛けられた真帆くんはしばし呆然とする。

「ただ、」

「な、なめんなっ！ あたしだって……ちょ、やめろっ！！ 離せっ！！」

すぐさま違和感を払拭するように声を荒げて臨戦態勢に入ろうとする真帆くん。それを察していた僕たちは彼女を押さえつけて、更衣室へと引つ張っていく。

「落ち着け。今は練習の時間だろ。みんなでバスケ、する時間だ」
「そうそう。みんなで……ね」

今日これからは慧心学園バスケットボール女子部ではなく、6年組としてだ。

紗季くんと僕の言葉を受けた真帆くんは暴れるのを止め、

「くそ、ナツヒめっ！ あとで覚えてろっ。あたしの実力、絶対に思い知らせてやる……」

くるりと向き直って自分の足で、更衣室に入ってしまった。それに、僕たちもついていった。

後ろでは昴さんが、ニヤニヤしながらもどこか満足げに夏陽くんをからかっていたが、なかなか良いコンビだと思って何もしないでおいた。

それから着替え終わると、8人で練習を開始した。

女子の練習メニューであるため夏陽くんには少々退屈だろうとは思ったけど、文句の1つも言わずに淡々と足並みをそろえてやってくれた。

真帆くんも、以前までのようなトゲトゲしい態度がいくらか軟化した彼の存在を居心地悪そうに意識しながらも、輪からはじき出す

ようなことはしないでした。

「……ねーすばるん、ズルしなかった？」

「……しただろ、絶対」

「ズルなんてするわけないだろ。平等にくじで決めた結果。文句はいいっこなしだ」

モップがけ等をして体育館をきれいにした後、昼食の準備をすることになった。今回のメニューはお好み焼き。お好み焼きは僕も作ったことないし、食べたこともないので作るのがすごく楽しみだ。ちなみに、今回のメニュー提案も昴さんだそう。

そして今、くじで班決めをしたところだ。真帆さんと夏陽くんはそろって2人仲良く生地づくり担当となった。ちなみに僕は、紗季くんと一緒に食材を切る担当になった。まな板と包丁を用意して、愛莉くんたちが洗ってくれたキャベツやイカ等を小さく切っていく。

「……はあ、ホント慧の手際いいわね。羨ましいわ」

「そんなことないよ。紗季くんの手際だっていいじゃないか」

キャベツの千切りをしていたら、紗季くんから羨望の眼差しを向けられ、しみじみとつぶやかれた。そういう紗季くんだって、かな

りのスピードと正確さでイカを次々にさばいているのに……。

「私も料理にはそこそこ自身があっただけだね……………やっぱり主婦にはかなわないか」

「いや、僕は普通に独身なんだけど……………」

ところどころ、視点がズレているような気がしてならなかったが、特に気にしないことにした。

「うん。これだけあればもう十分ね。ご苦労様、慧」

「ううん。紗季くんこそ」

「じゃあ私はこれを向こうのテーブルに置いてくるから、悪いけど包丁とか片付けてもらってもいい？」

「わかった。よろしくね」

そう言っつて、切った食材を持った紗季くんが台所から離れた。少し離れた場所にあるテーブルにそれを置いてくるついでに、夏陽くんと真帆くんの方を見に行くつもりなのだろう。

何があつたかはわからないが、前からあつた夏陽くんの真帆くんに対する尖った感情が朝から影を潜めていた。いや、完全になくなつていたといつても構わないだろう。時々見せる、昴さんの満足そうな笑みを見るに彼が何かやったのか、それともこの合宿を期に夏陽くんの心情に何か大きな影響を与えたのか……………。

いずれにせよ、もう2人は大丈夫だろう。以前紗季くんが教えてくれた、仲の良い2人にその内戻るはずだ。

また1つ、これで問題解決した気になつた僕は（別に僕がなにかやったわけじゃないけど）頬を緩めながらまな板や包丁を洗い始めようと、スポンジに手を近づけたところで……………

「誰っ！？ この山芋下ろしたのは！！」

今まで聞いたことのないような、怒声が部屋中に響いてきた。

「あ、あたし、だけど……？」

続いて恐る恐るといった声色の、真帆くんの声が聞こえてきた。

「あんたねえ！ こんな目の粗いおろし金ですってどーすんのよ！
！ これ全然滑らかさが足りない。何のために生地に山芋混ぜると思ってるの？ ダメ。もつときめ細やかにしないと全然ダメ。これもう一度すり鉢で……あーやっぱりいいわ。真帆じゃどうせ上手く出来ないでしょ。私がやるから大人しく見てて。 って夏陽っ
！！ あんたは何しでかそうとしてるわけっ！？」

まるでマシンガンのような凄まじい勢いでダメ出しをする声は紗季くん。急いで洗い途中だったまな板を立てかけて急いで向かう。すると、夏陽くんがポウルを抱えたままたじろいでいた。

「粉と、だし汁を……」

彼の返事を聞き、信じられないとばかりに目を見開いた後すぐにキツと細めると再び紗季くんは一喝。

「余計なことはしなくていいっ！！ そのだし汁、今冷ましてるところなんだから！！ そのまま入れたら熱で台無しになるでしょう！？ ……だいたいあんた、今分量で入れようとしてなかった？ 百年早いっ！！ その配分比が記事の一番の決め手になるのに……」

……いい。もういいわ、2人とも。ううん、トモも愛莉もひ

なもケイもご苦労様、あとはみんな席について待つてなさい。他の下ごしらえは終わったし、残りは全部私が
「ちよちよちよちよとまった!！」

先程にこやかに僕のとなりで一緒に食材を切っていた彼女はどこ行つた!？」

いきなりみんなに戦力外通告をした紗季くんに待つたをかける。ゆらりと上半身をねじらせてこちらを向く紗季くんは形容しがたい形相をしていて、正直声をかけたのを一瞬後悔した。

「何……………?」

その地の底から這いずり出してきたような声は、異論は認めないと暗に言っているようで、さらに僕の勇気を削いでいく。心なしか、みんな（昴さんを除く）が同情の眼差しを送っているような気がした。

「いや、その……………りよ、料理はみんなで楽しくやるものだと思うし。……………その、そんなに目くじらを、立てなくてもいいんじゃないかな……………とか、みんなで作ればいいのでは……………とか思ったりしちゃったり……………」

うう。昔日本のヤクザ映画で見た「なめてんのかわれ」字がわからないようです：覚】「的な鋭い視線に耐えられない。思わずだんだんと声は小さくなるし、視線もそらしてしまう。それに、何故だか胃が痛くなってきたような気もする。

ふ、と紗季くんが不適に笑うと腰に手を当てて氷のような視線で見上げてくる。

「……………ケイ。あなたは好み焼き……………作ったことある?」

「きよ、今日初めて見ます」

「だったら素人は黙って見ていなさい！！ お好み焼きをナメんじやないわよ！！ お好み焼きはね、千切り3年・混ぜ8年・焼きは一生！！ 少し料理をかじったくらいじゃおいしく出来ない職人業なの。わかった!？」

「Yes, sir!!」

「おお、ネイティブな英語」

「すごすごと退散し、みんなと一緒にちやぶ台に乗せられたホットプレートの前へお行儀よく正座。座ってからも体の震えと冷や汗が収まらず、たまらず自分の体を抱く。」

「だ、大丈夫？ 慧くん」

「恐る恐る、愛莉くんが心配そうに話しかけてきた。自分が怒られたわけでもないのに、怯えていたようで声は震えている。それほどすごい迫力だった。」

「一瞬……死を覚悟したよ。さ、紗季くんは一体……どうしたんだい?」

「紗季ちゃんのおうちってね、お好み焼き屋さんなの。慧くんは知らないかな？ すずらん通りアーケード街にある『なが塚』っていうお店なんだけど」

「うーん……ごめん。わからないや」

「基本的に僕の家では外食はしないので、僕はスーパーやスポーツ用品店くらいしかお店は把握していない。愛莉くんの口ぶりではなかなか有名なお店みたいだ。」

「そっか。すごくおいしいから一度行ってみるといいよ? ……そ

れで紗季ちゃんはね、昔からよくお店のお手伝いをしてたみたいなの。前に、みんなで焼きそばパーティをしたことがあるんだけど……その時も紗季ちゃんが全部焼いてくれて、私たちはお野菜切ったらもう休んでいいよって言うてもらって……す、凄く楽だったよ」

父さんから聞いたことがある。日本には、鍋にかなりのこだわりを持ち、あまりにも愛しすぎるが故に一から十まですべてを仕切らないと気がすまない人種がいると。確かにその人に任せれば凄くおいしく食べることが出来るけど、もの凄い緊張感の下で食べる破目になると。その人種の名は 鍋奉行!!!

とりわけ紗季くんは、その派生形で鉄板奉行とでも言えばいいのだろうか？

「こ、これが……日本の Japanese 独裁者 dictator………か」
「え？ それってどういう意味？」
「出来れば気にしないで欲しい。聞き流して」
「う、うん」

それから慣れない正座で、頭を捻りながら紗季くんが生地を運んでくるのを待つ。

お好み焼きは大変おいしかったです。

初めて食べたから一般的な味がどの程度なのかわからないけど、みんなの顔を見る限りはかなるの腕前みたい。

でも何故か僕を含めてみんな あの夏陽くんや真帆くんまでもがびしつと背筋を伸ばして自主的に正座をして無言で黙々と食べ進んでいた。

.....父さん。あなたの言いたいことが身にしみてよくわかりました。奉行という人種の恐ろしさが。

食べ終わった後、みんなと一緒に後片付けをすることが僕は出来なかった。理由は、足がしびれてそれどころではなかったためである。

scene・8 氷の絶対女王政（後書き）

慧の母については、その内オリジナルの章で触れます。

まださわりしか出来ていないので、更新しつつ内容をねりねりしたいと思います。

s c e n e . 9 素直になるじよ (前書き)

はいっ。更新です。

今回も昨日と同じくらい量の量です。

それではお楽しみください。

scene・9 素直になるじよ

- 交換日記 (SNS) 05 - Log Date 5/21

まほまほ

『みつけたっ！ これならいける！ こんどこそいけるっ！！ ア
イリーンたちはどうだった？』

あいら

『う、うん。一応、言われたものは全部買ったけど』

ひなた

『チヨコモ、買ったけど』

ケイ

『ついでにジュースも』

まほまほ

『よっしゃでかした！ チヨコモジュースもでかした！ そいじゃ
ごぶんごにしゅーごー！』

紗季

『コンビ二組が5分で戻るかバカ。ったく、1人で張り切っちゃ
ってもー』

湊 智花

『こっちの掃除も終わったよ！ うふふ、もう小石1つ落ちてない
から安心して！』

紗季

『あー。ずいぶん黙々とやってるなって思ったらそばにもう1人いたか、やる気満々……。』

ふふ、しょーがないな、もう』

午後からの練習は、男バスがコートを使うということなのでお休みになった。なので真帆くんが昴さんから許可を貰い、みんなで外へ遊びに出かける。でも、最初からみんなわかっていて。遊びと言っても、何をするかくらい……。

「アイリーン、もうちょい右っ!」

「こ、こっち?」

「行きすぎっ!!」

愛莉くんに肩車された真帆くんが大まじめに指示を出している。

今、僕たちは学校から少し歩いたところにある広い公園の中。そこで、底に穴の開いたポリバケツをロープを使って大きな木の幹に縛り付けて即席のバスケットゴールを作ることにしたのだ。発案は、なんと真帆くん。

今は自由時間だと昴さんから伝えられている。だから本来、遊んでいても何も言われないはずなのだ。それでも、真帆くんの意見に興奮気味に笑う智花くん。呆れ気味に苦笑する紗季くん。控えめに笑う愛莉くん。いつも通りの笑顔のひなたくんは驚きはしたもののすぐに賛同した。もちろん僕もだ。

近づいたら危ないとのこと、少し距離を置いて真帆くと愛莉くんの作業をみんなとみているが、悪戦苦闘する2人がすごく微笑ましくてつい頬が緩んでしまう。ふと、紗季くと目が合ってお互いに苦笑。2人の危なっかしい作業を見ながらも、真帆くんからあらかじめ手伝いは不要だと言われているので手は出せないから。

四苦八苦している2人を眺めていたら、僕のすぐ横をずんずんと2つの人影が通り過ぎていった。

「無理だよ、そんなんじゃ」

そして大樹の前でぶつきらばうな声を出す。

「……………夏陽？」

「おー。おにーちゃんと、竹中だ」

みんなの注目をいっぺんに集めたのは夏陽くと、彼に腕をつかまれた昴さんだった。

「……………っ！ 何しに来たんだよっ！？ 今、忙しいんだから邪魔すんなー！！」

だけでも真帆くんだけは一瞥しただけですぐに向き直り、再びポリバケツをくくりつける作業に没頭したかのように見せる。

「おい」

そんなささいな強がりを見目に、夏陽くんは後ろ指で木のほうを指差して昴さんをあげて促す。

「……ふ、あいよ」

苦笑いを浮かべながら、愛莉くんの傍まで身を寄せた昴さん。

そして腰を屈め、夏陽くんを肩に乗せて、真帆くんの隣へと並び立てた。

「な、何のつもりさっ!?!」

驚きつつ、真帆くんが声を荒げて夏陽くんに抗議する。

「真帆、お前はバケツ押さえてろ。……ロープ、俺が結ぶから」

「……竹中、君」

隣の愛莉くんが嬉しそうな声を上げる。僕たちに背を向けているから表情は見えない夏陽くんだけど、もう彼の声に棘はなかった。紗季くんと再び顔を見合わせ、また苦笑。……いや、微笑みあった。

「……よ、よけーなお世話っ!! だいたい今さら何だよっ!

! そんなことしたって、ゆるしてやらないもんっ!! ……あ、謝れっ! 手伝いたいんなら、まず謝ってからにしろっ!!」

「悪かった」

「謝っちゃうのかよ!?!」

「シカトして……悪かった。ちょっと、勘違いしてた、お前のこと」

……深く、頭を下げた。

「~~~~っ！ ……お、おいやめるよっ。なんかカユイだろ。わ、わかりやーいいんだわかりやーっ！ ……だ、だからナツヒっ、とっくと頭上げる！ ……らしくねーからっ！」

真帆くんはたちまち顔を真っ赤に染めて、正視できずにあわてて頭を振る。

でも、それ以上は拒絶しない。

「……ロープ、貸せよ」

言われるままに頭を上げ、しっかりと真帆くんに向き合った夏陽くんが、ぎこちなく促す。言葉に窮した真帆くんは口を閉ざし、視線をそらしたままロープを乱暴に押し付けた。

「ふっふ」

掛け声と共に夏陽くんが昴さんの肩から飛び降り、

「……出来たぞ。じゃーな」

大樹にがつちりとくくりつけられたポリバケツに背を向けたまま、まっすぐ公園を後にしようとする。

それをみた紗季くんが、肘で真帆くんの肩をつついた。

「（……ほら、真帆）」

「（うえ、やだよっ！ なんであたしばかりか！）」

「（いやいや、ここはやっぱり真帆くんじゃなきゃ……）」

「おー。たけなか、行っちゃうよ？ ねーたけな」

「（ひなちゃんっ、だめっ。今は真帆ちゃんじゃないと）」

「（おー。どうして?）」

「（あはは、ひなただと、上手く行き過ぎちゃうから、かなあ……?）」

「（あーほら真帆、早く行きなさいっ！ 夏陽帰っちゃうー!）」

「（……） ったいな！ 叩くなよ！ あーもうっ！ わかったよ、行きゃいいんだろっ!—!）」

合わせたわけでもないのに、みんなで真帆くんを代表としてはじき出した。

「ナ、ナツヒっ!! 待てよっ!—!」

そして走り出し、2つの結び目をなびかせて、とぼとぼと歩く意地っ張りな少年を留めに向かった。

「……………なんだよ？ まだ、何か用かよ?」

ブランコの前。呼びかけられた夏陽くんはそっけなく振り返ると、後ろ髪を搔きながらぶっきらぼうに返事をする。

「い、一緒にやってこーぜっ、バスケー！！ ゴール作るの手伝ってくれたお礼に、交せてやるからさー！！」

「……………別に、そんなつもりで手伝ったんじゃないし」
「んなつ！ なんだよこっちが誘ってやってるのにつー！！」

この期に及んでまだ意地の張り合いをする2人の会話は、たまたまなくもどかしくも……………どこか微笑ましかった。

「 よーし、じゃあ今日は俺も、一緒に試合しようかな。さあ、みんなで一緒にこの前みたいに2人組みになって、チーム決めしよう」

進まない状況のなか、僕たちに目配せをした昴さんが大声で宣言した。ほんの少し、気持ちばかりのサポートのつもりだろう。

「は、はいっ！！ じゃ、じゃあ昴さん。ぐーぱーお願いしますっ」

「ああ。いいぞ」

「じゃあ紗季くん。僕と」

「ええ。オツケー」

「じゃあひなちゃんは、わたしと！」

「おー。いいよ」

すぐに昴さんの意図を察して、すんなりと組み決めを開始した。

「……………余ったな、お前」

「う、うるせーっ！！」

ニヤニヤとした笑みと、歯をむく怒り顔が交差する。お互い言うべき台詞がわかっていているはずなのに……。なかなか言い出せず、まじまじと目をそらし合う。

「……仕方ねえな。1人、足りないみたいだし。ほら」

そう言って、夏陽くんがぶっきらぼうに拳を突き出した。

「初めから、そうしろっ……。！」

そこに真帆くんも手を伸ばす。何の合図もなしに、同時に2人は組決めじゃんけんを始めた。

「おっしゃー!! まずはおたしの華麗なシュートで……。お？」

手作りゴールと、不恰好なラインの中で開始された4on4。いつもの斜め45度ポジションから、真帆くんがポリバケツに照準を合わせてボールを掲げたところへ、それを阻む形で、さっと目の前に夏陽くんが立ちはだかった。

「相変わらず、そのこのシュートだけか? ……来い、抜いてみるよ

真帆

不適な笑みで挑発を向けられ、一瞬だけ面食らったようなそぶりを見せた真帆くんだけ、すぐに口元を歪め、八重歯を覗かせて吼える。

「ひひっ。よーやく、認める気になりやがったな、あたしの実力をっ……」

「……別に。教えておいてやるだけだ。真帆がまだまだ全然、バスケットの足元にも及ばないってことをな。ちよつとオトナゲねー気もするけど、お前がこれからもバスケット続けるってんなら仕方ねえ。これでもかかってほど、やっつけてやる。何度も、何度もな。……お前が俺に歯向かうかぎり、何度でも」

「ばーか、いつてろっ……」

満面の笑みで抜きにかかる真帆くんだったけど……。

「……………あれ？」

「……………うわ。お前、ドリブルは本気でダメダメだな。あー、悪い悪い。やっぱまだ、まともに相手するのは早すぎたわ」

あっけなくボールは奪われて夏陽くんの腕の中へ。

「ち……………ちつくしょー！ ももも、もう1回っ！！ もう1回あたしのドリブルからっ……」

「こーらっ、わがまま言うなっ。今度は私らの攻撃でしょ」

「こねる真帆くんを紗季くんは叱るが、言葉とは裏腹に穏やかな笑みを浮かべている。

「ふふつ、大丈夫だよ真帆っ、すぐに仇は取ってあげるからっ!!」
「……おいおいあんまナメんなよ湊っ!! 今度こそ負けねえ!
完璧に抜いてやる!!」

「たけなか!。パスー」

「え。……おう」

「ちょ、バカっ! 何やってんの!! ひなは敵でしようが!!」

「あ! し、しまった!!」

「えへへ。竹中君、ひなちゃんと同じチームがよかったよね。ごめんね」

「ばっ……ぜ、ぜんぜんそんなことねーよっ!!」

「さあ、攻守交替。行くよ智花くんっ!!」

「うん!!」

「っ、ちよっ!! それ反則じゃねっ!?!」

「はっはっは。いやだなあ。グレーゾーンだよ」

みんなの歓声が、木々で囲まれた公園に響き渡った。

この時になってようやく、合宿開始から初めて僕たち8人全員が心の底から笑いあった瞬間だ。

みんなで大騒ぎして、笑い合って、ルールやチームなんかもそのうちなくなっって、ストリートよりもめちゃくちゃな、でも何よりも楽しい。ただただ本当に楽しいだけのバスケットを、ボールが見えなくなるまで堪能した。

練習とは程遠い、楽しむだけのバスケットだったけど、そんな楽しい時間が僕たちの成長を促しているようで……僕たちは、どんどん強くなれるような気がした。

そして完全にボールが見えなくなっって、へとへとになっって小屋に戻ると、

ちやぶ台の上にケーキと大量のデリバリーピザが乗っかっていた。

s c e n e ・ 9 素直になるじよ (後書き)

やっと仲直りできました。

次回は……もう少し慧と夏陽を絡ませようかな……………。

感想お待ちしております。

s c e n e ・ 1 0 自主練シューター（前書き）

はいつ。更新です。

タイトルは適当です。決して、決して！！！！　キャラソンなんか
じゃないんだからねっ！！（何

scene・10 自主練シューター

- 交換日記 (SNS) 06 - Log Date 5/21

紗季

『いた?』

あいら

『うっん……。こっちは』

湊 智花

『建物には入れないし、もう中等部側は探すところ無いかも……。もしかしたら学園の外か、初等部の方かな。でも初等部の方に行くには……』

紗季

『初等部の方かな……。あの子、そっち系は全然平気だし』

まほまほ

『い、いっかいぜんいんしゅーごーしよーぜっ!?!』

紗季

『そっするか。そっち系でんでだめな真帆がおもらしたら大変だし』

まほまほ

『しねーよするかばっ!?!』

紗季

『……わかったわかった。とにかく、うん。一度小屋に戻ろう。長谷川さんも帰ってるかもしれないし』

あいら

『どこいったちゃったんだろっ、ひなちゃん』

紗季

『それと、慧から連絡は？』

湊 智花

『うっん。まだ返事返ってきてない』

まほまほ

『へやにはいったら“れんしゅうしてくる”っておきてがみだけだもんなー』

あいら

『も、もしかしたら、慧くんの近くにいるかもよ？ ひなちゃん』

紗季

『そっね………まあいずれにしても、一旦小屋に戻りましょうっ？』

「けーい。なにやってんだ？」

「……！！……ああ、美星先生。驚かさないでくださいよ」

体育館が開いていなかったの、近くで地面が平らな、そしてボールを使っても迷惑にならなそうな場所を探してさまよっていたら、後ろから声をかけられた。驚き振り返ると、そこには腕を組んで微笑みかけてくる僕たちの担任。美星先生がいた。

苦笑して返事を返すと、いつものように真帆くんとかわらないような笑み。

「にやはは。悪い悪い。それで？ 何してんだ、こんな遅くに」

「……昨日は色々あって練習にほとんど参加出来ませんでしたからね。少しでも、自主練しておきたくて。それで、よさそうな場所を探していたところです」

そう返すと、口元を押さえて何かを企むような怪しい笑みを、先生は浮かべた。

でも正直先生の容姿でのその笑みは、いたずらを考える子供みただった。

「にゅっふっふー。じゃん！！ これなーんだ」

「……………鍵、ですか？」

「えー、慧反応うっすー……………」

取り出したのは、一般の家等では使わないような長くてゴツイ鍵。とりあえず先生の質問に答えただけなのに、興奮めしたようにがっくり肩を落とす先生にあわててしまふ。

「え、あつ別にそういつつもりじゃ……ん？　これってまさか……」

とりあえず先生を慰めようと近づいた時、今まで夜の闇で見え辛かったその鍵の細部までよく見えるようになる。鍵についてるストラップや、柄の形に見覚えがある。いや、これはいつも扱っているものだったと思う。

僕の記憶が正しければ……。

「もしかして体育館の鍵ですか!？」

「ピンポンピンポン!!　　ホレ」

「うわっ!!」

鍵の正体に気づき呆けていると、先生が鍵を放り投げてきた。

手に持ったボールを落とさないように片手でそれをキャッチする。意外と重いそれは、手に当たると同時にジーンと鈍い痺れを僕の右掌に与えた。

「つかってもいいんですか？」

「ああ。思う存分体を動かせ。ただし時間外だから内密にな」

「ありがとうございます!!」

お礼を言うと、二の句も告げずに走り出す。

そんな僕の背中を見ながら、苦笑する美星先生を置いて。

「ふう……………広いなあ……………」

電気をつけた夜の体育館に、思わず溜息が出る。こんなに広い場所を独り占め……………思わぬ贅沢に思わず頬が緩む。

堪能するように、1つ、2つとドリブルをついてみると、いつもと同じはずなのにそれ以上に大きく聞こえる破裂音。無人の体育館に反響し、しつこく存在を主張し続ける。

いつまでもドリブルをしているわけにもいかないので、早速練習を開始する。

ドリブルでゴールまで近づき、適当なところでストップしてそのまま後ろへ飛んでフェイダウェイシュートを放つ。僕の異常に曲がる手首によって実現した、異常な回転のバックスピんがかかったシュートは僕から見てリングの奥、その内側にあたると跳ね返ることなく、ボールの回転にしたがって地面に落ちる。

そこまでの一連の動作は、同年代の人と比べてとても滑らかで早いものだ。自惚れかも知れないけど、僕は思っている。

「よし、快調だ」

そしてそれを拾うときフェイダウェイを撃った場所に戻り、今度はゆっくりとセットからのジャンプシュートを放つ。

先程のフェイダウェイとは違い、1つ1つの動作を意識したセツトシュートは堅苦しくてやりにくいものだ。したがって、フォームはバラバラ。さっきのように思うようなスピンもかからず、ボールは軌道を大きくずらして右へとずらしてコートに落ちた。智花くんが得意とするセツトからのジャンプシュート。そして、誰もが必ず練習するシュートでもある。

しかし今まで、ストリートで自由気ままにやってきた僕にはもう撃てなくなったシュートである。だから僕は、非常に悩んだ。

ここ最近の練習で、わかったことがある。それは、僕がいままでストリートで築いてきた技の大半が、1対1ならともかく3対3などのチーム対決になると使い勝手の悪い代物だと言うことだ。

智花くんや真帆くん、紗季くんのシュートと違って動作がダイナミックで大振りな分だけ、人数が多い密集した場所では使えないからだ。

そこから導き出した、これからの自主練の課題は2つ。『パスでもシュートでもドリブルでもいいから、チーム戦で有効な技の開発』と『セツトシュートの習得』だ。

セツトシュートの習得は、これから時間をかけて地道にやっついてくしかないだろうが、実は1つ目の課題はもうすでにいくつか案を出していた。そして、さっき撃ったシュートでそれは使えるということもわかった。

これで骨組みは完成。あとは、それを形にしていだけだった。

とりあえず新しい技の開発はできそうなので、もう1つの課題であるセツトシュートの練習に切り替える。

「まずは……ゴール下からかな」

先日インターネットで調べて効果的な練習方法を思い出しながら、練習内容を頭の中に描いていく。

ゴールに近づくと、1.5歩くらい離れたところで立ち止まる。角度は斜め45度。書いてあったアドバイスどおりに肩の余分な力を抜き、1つ息を吐いて落ち着いてから足に力を入れて跳躍し、頂点に達したところでボールから手を離す。思い描くのは、練習の度に見ている理想的なフォームの智花くん。

放たれたボールは強烈なバックスピんがかかりながらバックボードに当たり、キュツと甲高い音を鳴らした後、

「……………」

ボールが進む力がバックスピンの回転に負けて、バックボードを起点にきれいなVの字を描き見当違いな方向へと落ちていった。…

……………ふむ。

「問題はこの手首か……………」

無茶苦茶なシュートでも軌道を安定させるために習得した、異常なほどボールにスピンをかける手首。自分の意思とは無関係に、スピンをかけるのはもう癖になってしまったようだ。でも…………。

「うん。新しい技、思いついた」

やりたいものは上手いかず、余計なものばかり増えていった。いや、本当はこっちも目標の1つだけど、なんと言うか……………片方だけいやに達成スピードが速すぎないかな？

やれやれと溜息をつく、再び練習を開始しようと腕を上げる。するとそこへ……………。

ガララッ

「あれ？ やっぱ鍵開いてるな。誰かいるのか？」
「おー。ラッキー？」

扉を開ける音が響き、振り返るとボールを片手に持った夏陽くと、手ぶらのひなたくんがそこにいた。

「おー、けい」

「やあ、ひなたくん。夏陽くん。君たちも練習かい？」

「ま、まーな」

いち早く僕に気づいたひなたくんが、いつもの笑顔で手を上げて挨拶してきた。僕も、ボールを片手に左手を上げて軽く挨拶を返す。夏陽くんは、気まずそうに視線をそらしながらも後ろ髪を搔いて返事を返してくれた。

「っていつか慧。ここ、お前が開けたのか？」

「ここ、とは体育館のことだろう。まあ、真相は違っけど……」。

「まあ、そうなるね」

嘘は言っていない。実際開けたの僕だし。

「けい。ここで練習、してもいい？」

「うん。僕も1人で寂しかったところだからね。じゃあ一緒に練習しようか」

「わーい。ひな、がんばる」

無邪気に諸手を上げて喜ぶひなたくん。その姿に思わず頬が緩み、思わず頭を撫でてしまった。

その後ろで、夏陽くんが複雑そうな表情をしているのに、僕は気づいていなかった。

scene・10 自主練シューター（後書き）

夏陽の浮かべた複雑な表情は2人だけの時間じゃ無くなった無念さか、それとも別の何かか……。

感想お待ちしております。

scene・11 頑張る気持ち(前書き)

はいつ。更新です。

すぐ終わるかなーとか思っていたのですが、書いていたら予定よりも長くなってしまいました。

いつもよりもちょっぴり長めですが、楽しんでいただければと思います。

scene・11 頑張る気持ち

「夏陽くんも、自主練しに来たの？」

ひなたくんの後ろで佇んでいた夏陽くんに声をかける。彼は声をかけられるとは思っていなかったのか、びくつと大きさに反応した。なんだか最近、夏陽くんのこういう反応が多い気がするが気にしないでおう。

「え、あ、いや……俺は……」

「たけなかは、ひなのコーチ」

「ん？ コーチ？」

答えてくれたのは、すぐ近くににいるひなたくん。

「おー。ひな、シュート入れられるようになりたい。だから頼んだ」

「へえ〜。それはいいことだね！ 夏陽くんも結構シュート上手だから、きつと入るようになるよ」

「おー。だからたけなか。よろしくお願いします」

ひなたくんがぺこりとお辞儀する。

「……お、おおー！ 任せろー！ でも、手加減はしないからな！」

頭を下げられたのがわかった夏陽くんは、ワntenポ遅れてどんと胸を張る。そのどこかえらそうな態度に、思わず笑みがこぼれた。

「で、慧は何をやってたんだ？ お前も自主練？」

「まあそんなところ。ついでに新しい技の開発かな」

「……………お前まだ増やせるのかよ」

「あははは……………」

僕が笑ったのに気づいた夏陽くんは、むっと顔をしかめながらも話しかけてきた。別に今の課題を話すことも無いかなと思って（決してセットシュートが出来ないのが恥ずかしいわけではない）あいまいに答える。

「だけど、技の開発について言ったら驚いたような呆れたような顔をされてしまったので、苦笑した。」

「1on1とチームプレイだと勝手が違ってね。だから今は、チームプレイで使えそうな技をパスやドリブルを中心に考案してるんだ」

「へえ……………」

「ほ……………」

続いてそう話すと、感心したような声を上げる2人。

でもその顔が、何か失礼なことを考えていることを物語っている気がしてならない。

「……………」意外とコイツも、考えてやってるんだな。ただただ考えなしに技を開発してるだけじゃないんだな。』とでも言いたげな顔だね?」

「そ、そんなことはないぞ!？」

「おー。気のせい気のせい」

「本当かなー? ひなたくんはともかく、夏陽くんはものすごく怪しいけど……………」

「まあ疑っていてもしょうがないし、」

「ふーん。まあそういうことしておくよ」

「ほっ……」

「そんなことより、ちょっとお願いっていつか提案があるんだ」

やれることをやることにしよう。

「提案？　なんだ？」

急に話を変えたけど、気にした様子も無く返してくる。

「うん。夏陽くんはひなたくんにシュートを教えるんでしょう？」

僕もそれに協力するから、僕の練習にも2人に協力して欲しいんだ」

「協力？」

「そ、協力。せっかく人数もいるんだし、これを利用しない手はないと思つて。あ、もちろんひなたくんの練習もしっかり協力させてもらおうよ？」

「おー。でもけい、ふつーのシュートへたくそ」

………　もうちょっとオブラートに包んだ言い方しようよ。

胸がえぐられたように痛むんです。

「確かに、お前練習で見てたけどセットシュートめっちゃくっちゃじゃねーか。……フェイダウェイとかはまあまあだったけど」

更に追い討ち。後半はほめてくれたみたいだけど、僕の耳には入ってこなかった。

がっくりと肩を落とし落胆するが、何故だが『ふふふ……』と自虐的な笑みがこぼれてきた。ひなたくんと夏陽くんは戦慄が走ったような顔をしているみたいだ。

「世の中にはね、2種類の人間がいる」

「は？」

「1つは考えなくても体が勝手に動く人。もう1つは、理論がわかっても体が動かない人」

「……………な、何が言いたいんだ？」

「要するにだね」

混乱したような夏陽くと、聞いているのか聞いていないのかわからないひなたくん。

夏陽くんが急かしてくるが僕はあえてゆっくりとした口調で続ける。

「僕は、後者だということだよ。だから」

バツと顔を上げて、ひなたくと向き合う。

「だから、ひなたくんには口でわかりやすく教えてあげよう」

「おー。よろしくお願いします」

僕が出来る限り最高の笑顔をひなたくんに向けた。ひなたくんも理解してくれたのかどうかはわからないが異論はないようで、僕にも師事を仰ごうとお辞儀をしてきた。

「……………ちょっと待て。それって俺が考えなしのバカって言いなのか!？」

「え? ………………ああああ!! ごごご、ごめんよ夏陽くん!!
そういう意味で言ったわけじゃないんだ!!」

夏陽くんの言葉に、失言があったことに気づいた。さっきの言い回しでは夏陽くんを遠まわしに、『上手く説明できない、体が先に

動くバカだ』と言っているようなものだということにだ。

僕自身では、そんな風には一切思っていないなかったのだが……。

「ただ、僕の体がセットシュートに対して拒否反応を起こしているようなものだから、どういう風にシュートを打てば入りやすくなるかは理解してるけど、セットシュートになるとそれができなくなるってことを説明したかったわけであって決して君のことを考えなしの人間だと思ってるわけじゃ……。」

「わ、わかったわかった！！俺も過剰に反応しすぎただけだから気にしないでいいって！！」

畳み掛けるようにいうはめになってしまったが、僕のあわてた様子にさっきの言い方が故意ではないことをわかってくれたようだった。

「そ、それじゃあ始めるとするか……。」

「おー」

「うん。よろしくね」

そうして、まずはひなたくんのシュート練習から始まることになった。

「いや、だから手だけで打ってもひなたの場合届きづらいんだって。もっところ、膝を使ってさ……」

「ぶー。たけなかの話は難しい。なんでシュートで膝なの？ 手でするんじゃないの？」

「……もちろん膝で投げるんじゃないけどさ。なんつーか、イメージで。もっところ、グツと踏ん張って……あーどう言えばいいんだろ」

「膝を使うっていうのはね、高くジャンプするってことだよ。膝を曲げて腰を落として、上に跳びながらシュートを打つ。……そう、ちょうどカエルかカンガルーみたいな感じかな」

「おー。カエルみたいに跳ぶ。……ぐっ。おー、届いた。たけなかのぐつと、けいのカエルでやったらいっぱいなんだ」

「そう、そんな感じだ！！ 今のを忘れずにもう一回」

外から見ればなかなか滑稽な状況だろう。

ただたどしく要領の得ない言葉で何とか自分のイメージを伝えようとすると少年と、彼の言葉どおりにボールを放ち、それがリングに届かずネットにかすっただけでも喜ぶ少女。そして、時々口を挟みながら極力手を出さずに見守っている僕。

最初は色々口出しするつもりでいたが、2人の一生懸命な姿に思わず躊躇ってしまい、それ以来夏陽くんの言葉を補足する程度しか口を挟めなくなってしまった。

ボールをリングに届かせることが出来ないひなたくん。お世辞にも上手とはいえない指導をしている夏陽くん。そんな2人を見ても焦れたりイライラしたりしないのは、その姿から伝わる集中力の度合いと真剣さからだった。

そう思っているのはここにいる僕だけではなく、さっきから姿を隠そうともしないで覗き行為に没頭する昴さんたちも同じだと思う。さっきちらつと携帯電話を見たときにメールが智花くんから入っ

ていた。内容はひなたくんがいなくなってしまったから一緒に探して欲しいというもの。どうやら、探していたらこの場面に遭遇したみたいだ。

全集中力をリングとボールに注いでいる夏陽くとひなたくんは気づかない。そんな2人を邪魔しないように静かに見守るみんな。その優しさに、胸にじんわりと暖かいものが広がった。

「……おー？　なんか、ぷるぷるしてきた」

もう何本目になるかわからないシュートを放った後、ひなたくんが不思議そうに自分の二の腕をさする。まだ筋力が弱いので、ここに来て結構な数のシュートを打っているのでかなりの疲労が蓄積されているのだろう。それでなくても、その前にみんなでボール遊びをした後なのだから。

明日は筋肉痛が相当辛いものになるかもしれない。後でマッサージしてあげよう。

「少し、休もう」

僕が言おうとして口を開きかけたが、夏陽くんが笑いながらその場に座り込み、ひなたくんを促した。

「おー。休憩」

ぼすんと、ひなたくんもあひす座り。

「……なんか汗拭くもの、持ってるか？　そのままだと、風邪ひくぞ？」

至近距離で対峙するひなたくんから何故か顔を赤らめて目を逸ら

しつつ、気遣いを重ねた。……真帆くんと扱いが凄く違うね。

「おー。ハンカチ、持ってきたはず。……あれね？」
「どうした？」

「ハンカチ、無くなった。落としたかも」

「……あーあ。もったいないな」

「おー。もったいない事した」

目当てのものが見つからず、まさぐっていた体育着のポケットから手を出して、ひなたくんは肩をすばめた。

「お気に入りだったのになー。むねん」

ぺたんと内股のまま、体育館の天井を仰ぐ。

「……あ、明日っ。探してやるよ。……一緒にっ」

「おー。ほんと？ わーい」

「僕も一緒に探してあげるよ」

「おー。ありがとう」

「……」

「ん？ どうかしたかい？」

小屋からここまで来るのに結構距離があつたはず、2人で探すのにはなかなか広いだろっからよかれと思って声をかけたのだが、夏陽くんからなんととも言えない微妙な表情を向けられた。

まあ、それを気にすることなく、僕はコートの端に置いといた荷物のところまでより、目当てのものを拾って2人に近づく。

「はい。タオルと飲み物。ひなたくんは僕の使いかけ飲みかけで悪いけど我慢してね」

「おー。ありがとー」

「……………さ、サンキユ」

にっこり笑顔のひなたくと、顔を赤らめて目を逸らした夏陽くんがそれを受け取る。それを確認すると、ひなたくんをはさんだ夏陽くんとは反対側に座った。

「おー。ぶるぶる直った。よし、もう一回」

ひなたくに渡したスポーツドリンクを2人で飲みながら、1人でも出来るマッサージ方法を教えた後、健気な宣言と共にひなたくんが立ち上がった。

「……………なーひなた。どうしてそんな、頑張るんだ？」

次いで腰を上げながら、夏陽くんは心底不思議そうに彼女のやる気に満ちた顔を覗き込んだ。

すると、疑問を投げかけられたひなたくんは「今までそんなこと考えたこと無かった」とでも言いたげな思案顔で首を捻り、むー……………としばらく唸ったあと、

「いっしょがいいから」

ぱつと顔を上げ、自分の気持ちを表現するのにぴったりな言葉が見つかってよかったとばかりに、微笑んで答える。

「いつしょ？」

「おー。ひなだけへたくそだと、みんないつしょに楽しくなれない。だから、頑張らないと」

「ひなたくん……………」

そんなことない。へたくそでも、みんな一緒ならそれだけで楽しいから。……………なんて無粋な言葉は口に出せない。それほどに、ひなたくんの優しい微笑みからは、強い意志のようなものがあふれていた。

「……………そつか。みんないつしょに、か」

「おー。だから、よろしく」

そう言つて、再びゴールと対峙する2人。

夏陽くんのアドバイスの下に小さい体を何度も弾ませて放つそのシュートは、リングにやっと届くかどうかという実におぼつかないものであった。

でもそれは、僕がどんなに技を磨いても出せないような美しいものだった。

黙って覗いていた昴さんたちも満足したのか、来た時と同様黙つてその場を後にしていた。

「……………そう言えば、シュートが上手になりたいなら、それこそ
コーチである昴さんにも頼めばよかったんじゃないかい？」

「ふ、ふんっ！！ そりゃあんなロリコン野郎なんかよりも俺がよ
かったからに決まってるだろ！？」

「おにーちゃんには、ないしょ」

「ん？ ないしょ？」

「こっそり上手になって、おにーちゃんに褒めてもらうの。だから、
今日のところはたけなかでがまん」

「……………」

「そっか。ひなたくんは本当に昴さんが大好きなんだね」

「おー。おにーちゃんだいすき」

「俺……………ちよっと外行つて涼んでくるわ」

「？ うん。行ってらっしゃい」

その背中が、もの凄い哀愁を漂わせていた。

次の日から夏陽くんが昴さんに強く当たるようになったのだけど、
何故だろうか？

scene・11 頑張る気持ち（後書き）

その後、夏陽は外でさめざめと泣いたという……………。

はいつ。この日の話はもうちょっとだけ続きます。

あと2話くらいかな……………？

慧が、超鈍感&残酷キャラになってしまったのは、予定外です。

scene・12 侵入者は許しません(前書き)

はいっ。更新です。

今回は駆け足みたいになってしまいました。前回のあとがきで、後2話くらい夜の話を続くと書きましたが、とりあえず今回で日付が変わります。

それでは、お楽しみください。

scene・12 侵入者は許しません

「……………よし、じゃあもうおしまいにようか」

ひなたくんの手が上がらなくなってきたので、その声をかける。
ひなたくんはちょっと不満げに、夏陽くんは迷いながらもどこか納得した顔で僕のほうを見る。

「ぶー。もう終わり？」

「そうだね。やりたい気持ちもわかるけど、オーバーワークは禁物だよ」

「だな。怪我したら元も子もねーし……………じゃあ、今度は慧の練習の手伝いか？」

「いや、それはいいよ」

若干疲れた様子を見せながらも、イヤそうな顔を一切見せないで
そう言ってくれるのはありがたいけど、

「2人とももう疲れたでしょ？ それに時間も遅くなってきたし……………
片付けとかは僕がやっておくから、2人は先に小屋に帰ってて」
「いや、でも……………」

僕よりも自分たちのほうが長く使っていたことに罪悪感を感じた
のか、ばつの悪そうな顔で引き下がろうとしない夏陽くん。

「大丈夫。開けたのは僕なんだから、閉めるのも僕がやるよ。……………
それより、ひなたくんを送ってあげて」

「……………ああ、わかった。ほら、ひなた。行こうぜ」

「おー。けい、どうもありがとう」

「うづうん。どういたしまして」

長い沈黙の後、諦めたのか溜息をついてひなたくんを促す夏陽くん。ひなたくんも、僕に1つお辞儀をした後、小屋へと帰っていった。

「……………」

体育館が、再び沈黙に支配される。

ひなたくんは、今日一日でずいぶん成長した……とは一概には言えないが、一歩ずつ確実に進歩している。それはひなたくんの、純粹に上手くなりたいと思う気持ちと、夏陽くんの彼女に対する真剣な指導があるからだと思った。

……………選手が成長するのに、わかりやすい解説書や腕のいいコーチは必要ないのかもしれない。純粹に上手くなりたい。楽しみたいという気持ちと、それを支える無条件な人を想う気持ちが、成長を促すのだと、僕は思う。

「ひなたくん。きみはもう……………立派な選手だよ」

だからこそ、2人の背中が見えなくなった闇に向かって、ポツリと呟いたんだ。

さて、僕ももう少しやっつけていこうかな。僕にも、彼女たちのような純粹な気持ちがあることを信じて……………。

『やっぱりまだやってやがったか』

『！！ 夏陽くん。どうして……』

『手伝うって言ったのに、約束守らないで帰るのは後味悪いからな……。し、仕方なくだ！ 仕方なく!!』

『……………ふふ。ありがとう。それじゃあお言葉に甘えて、手伝ってもらおうかな』

『お、おう!! ！？ 何をすればいいんだ?』

『そうだね……………まずは、ちょっとパスの相手になつてくれないかな?』

『パスの? そんなんでいいのか?』

『うん。ちょっと変わったパスを思いついてね。もう大体形は出来たから、キャッチしにくいとか、そういうところを見て欲しいんだ』

『ああ、わかった』

『……………』

『ど、どうだい？ やっぱりやり辛い……………かな？』

『い、いや……………驚いて言葉が出なかったただけだ！ キャッチもしやすいし、それに何より……………これはカット出来ないだろ』

『そうかい？ よかった……………それじゃあ成功みたいだね』

『ま、まあ……………アイツら、特に真帆が取れるかどうかだけだな！』

『大丈夫。きつとみんななら取ってくれるよ。……………ありがとう。手伝ってくれて』

『べ、別に約束を守っただけだし。そんなお礼言われるようなことじゃねーよ』

『それでも、ありがとう。……………さ、もう帰ろう。僕は鍵を返してくるから、夏陽くんは先に帰ってて』

『また黙って練習してようとか思ってねーだろうな？』

『ふふ、大丈夫だよ。さすがにもう遅いし疲れたし。返したらすぐに帰るから』

『……………はあ、わかった。それじゃあお先』

『うん。それじゃ』

「よっ。お疲れさん」

「あ、お疲れ様です」

電気を消して、扉に鍵をかけたところで図ったかのように美星先生が声をかけてきた。

「こんな遅くまでよーやるな……ほれ、鍵預かるぞ」

「はい。ありがとうございます」

鍵を手渡す。ずっしりとした重さが手の中から消え、少し開放感。けれど、美星先生は受け取った後少し考え込むような顔をして、やがて口を開いた。

「……なあ慧。今のバスケ、みんなとプレイするバスケは面白いかな？」

「？ ……ええ」

どこか引つかかる、裏があるような言葉に少し首を傾げてしまっが、純粹に本心を語ることにする。

「今まで僕は、個人技のバスケしかやってきませんでした。でも慧心学園に来て、みんなと力を合わせる楽しさに気づきました。以前の僕では、チームプレイのための技なんて考えもしなかったのに、今はそれしか考えてない………凄く、楽しいですよ」

迷いなく、そう言えた。

美星先生は期待していた言葉が返ってきたのか、満足そうな笑み

を浮かべると僕の横に回って背中をばしばしと叩いてくる。

「そうか！ よかったよかった！！」

「昴さんや、みんなのおかげですよ。……いい甥っ子さんをお持ちで」

「いやいや、どーしようもないロリコン野郎だよ」

いやいや、そんなことはないと思いますよ？ 昴さんはみんなのことを、妹みたいに思っているみたいですし。

「今日はもうゆっくり休んで、明日に備えな」

「はい。ありがとうございます。……それでは失礼します」

「ああ。また明日」

僕が背を向けて歩き出しても、先生は軽く手を振り続けていた。

でも、僕が真っ先に向かったのはみんなが眠る小屋ではなく、台所だった。朝食は大事だからね。仕込みだけ終わらせておいて、すぐに朝食を作れるようにするために。

もうみんな寝た頃かな？ 体育館の後片付けと、明日の朝食の仕込みが思ったよりも長引いてしまったので、凄く遅くなってしまった。

みんなを起こしてしまつたら申し訳ないし、静かに足を忍ばせて小屋の裏を通り過ぎようとした時……………それは聞こえた。

「さてと、そろそろか」

この声は、昴さんかな？ 一体どうしたのだらう？
深夜にもかかわらず、何か一大決心したかのような思いつめた声。
そのあと、断続的に聞こえるぺちぺちと何かを叩く音。

「……………んあ？ ……っ……………なんだよ……………くあ」

次いで聞こえるは、眠そつな夏陽くんの声。

「起きたか。よし、じゃあひなたちゃんのパンツ返しに行くぞ」
「……………ああ、パンツな。よし、行くか……………ってなぜそれをつぶがー！」

ん？ なんだって？

今、看過出来ない言葉がいろいろ聞こえてきたような気がした。
……いやいや、さすがに僕も疲れたのかな。練習のしすぎかな？
ははは。

「やれやれ、2人に不名誉を与えてしまうような幻聴が聞こえてしまっ
まうなんて……」

「んーにゃ。幻聴じゃねーよ。安心しろ」

「そうですか。じゃあとりあえず疲れてはいないらしい　　っ
て、何故先生がここに？」

職員室に体育館の鍵を帰しに行ったはずの美星先生が、僕の後ろ
で腕を組んでなにやら神妙な顔をしている。

「ちゃんとみんなねてるかなーと思って来てみたら……思わぬ場
面に遭遇してみたんだ」

「は、はあ……」

確かに、もしあれが本当に彼らの会話だったとしたら、見過ごす
わけには行かない。

今は声を抑えて話しているのか壁越しでは何を話しているのか
はわからない。

「あの……先生」

「うん？ どうした？」

「つかぬことをお聞きしますが、もし2人が不埒な行為に及んだ場
合は　　」

「慧、夏陽は頼むぞ」

「……………了解です」

僕の話が終わる前に、ふすまが開かれる音がかすかに聞こえた。

位置から考えるとそこは……女子の寝室へとつながる場所だ。その瞬間、美星先生の顔に影が宿った。有無を言わせぬ声で夏陽くんの処理を言い渡され、僕は彼に説教をする係りになってしまったようだった。

彼らが女子の寝室に入った後、何かが崩れ落ちるような音がしたり、それによって紗季くんや真帆くんが騒ぐ声がしたり、僕を苦しめた黄な粉弾が炸裂したらしい音（心の底から、寝室にいらなくてよかったと思った）がしたりした。そして、その騒ぎの乗じて逃げ出したであろう2人の侵入者が、小屋の玄関から逃亡するのを確認。

「それじゃあ慧。……後は頼んだぞ」

「……………はい。美星先生」

昴さんの無事を祈りながら、鍵が開いていた和室の窓から中へと侵入した。

「やーお帰り夏陽くん。どうだった？ 女子の寝室に忍び込んだ感想は？」

「なっ！！ けけけっけっけっ慧！？ 何でそれを！？」

安心しきって和室へと入り込んできた夏陽くんは、暗闇の中から声をかけた。まさかバれていたとは思っていなかったであろう彼は、思わぬところから声を掛けられてかなり動揺していた。

「ちょうど明日の朝食の仕込みを終えて小屋に帰ろうと外を歩いていた時にね、聞こえてしまったんだよ。ひなたくんの下着は、無事に返せましたか？」

にっこりと笑顔を向けると、彼は壊れた人形のように何度も首を立てに振る。

「そうですか……それじゃあちょっと移動しましょうか。台所辺りまで」

「はい……………」

再び窓から外に出たあと、台所へと向かった。ここはみんなが寝ている寝室とは少し離れているし、少し騒いでもみんなに迷惑はかからないだろう。

「さ、夏陽くん。そこに座りましょう」

「はい……………」

あえて椅子を指さず、畳の床に座るように促した。引きつった顔をしながら、夏陽くんは正座をする。僕も、その正面に正座をした。

「さて、夏陽くん。たっぷりお話ししましょうね？」

「はい……………」

「それではまず、なんであんなことをしたのか位は聞かせていただきますでしょうか？」

僕がそう言うと、恐る恐る夏陽くんは口を開いた。

ひなたくんの下着は、お風呂に入った時偶然見つけてしまったそう。最初はそれが何だかわからず、広げてみたところ初めてひな

たくんのものだとわかり、あせつた時に昴さんに声を掛けられてとつさに自分の懐に隠してしまつたらしい。更に、実はその下着は昴さんがあらかじめ更衣室においていたものだとも言つた。彼もまた、夏陽くんとほぼ同じ理由でそれを拾つてしまつたとか何とか。

「……………ふう。だいたい理由はわかりました」

「ほつ……………」

「でも」

ほつと一息ついたのもつかの間、ビクツと体を震わせて僕を見上げる夏陽くん。……………事は、そんなに簡単なものじゃあないのですよ。

「それが、寝ている女子の部屋に侵入していいという理由ではありませんよね？ それこそ、窓から出て再び脱衣所に行つて下着を置いてくるとか、他にも色々考えれば出来たはずです」

「はい……………」

「それに幼馴染だろうとライバルだろうと、いるのは全員寝ている女の子なのですよ？ 寝ている自分の姿は見れません。中にはその姿を見られてシヨックを受けてしまつ子もいるでしょう。そのところをちゃんと理解していましたか？」

「すみません。考えが足りませんでした……………」

「夜はまだまだ長いです。たっぷりお話ができますね」

「け、慧……………さん？」

不安げにこちらを見る夏陽くん。でも、僕の話は続くよ……………。

「きみには、女性に対するマナーやその他諸々をたっぷりお教えしましょう。……………大丈夫。人間5日くらい寝なくても死にませんから……………」

それから夏陽くんに対する、マナー講義が始まった。

終始萎縮しっぱなしだった夏陽くんは素直に全部聞いていたので、思ったよりも早くそれは終わった。

時計を見ると、午前3時を回っていたけど……………。

scene・12 侵入者は許しません(後書き)

ちょっと慧がうるさすぎましたかね？

でも、女性の寝室に勝手に入るのはいけないと思うのです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2130w/>

ロウきゅーぶ！～脆弱な6人目（シックスメン）～

2011年10月17日03時00分発行